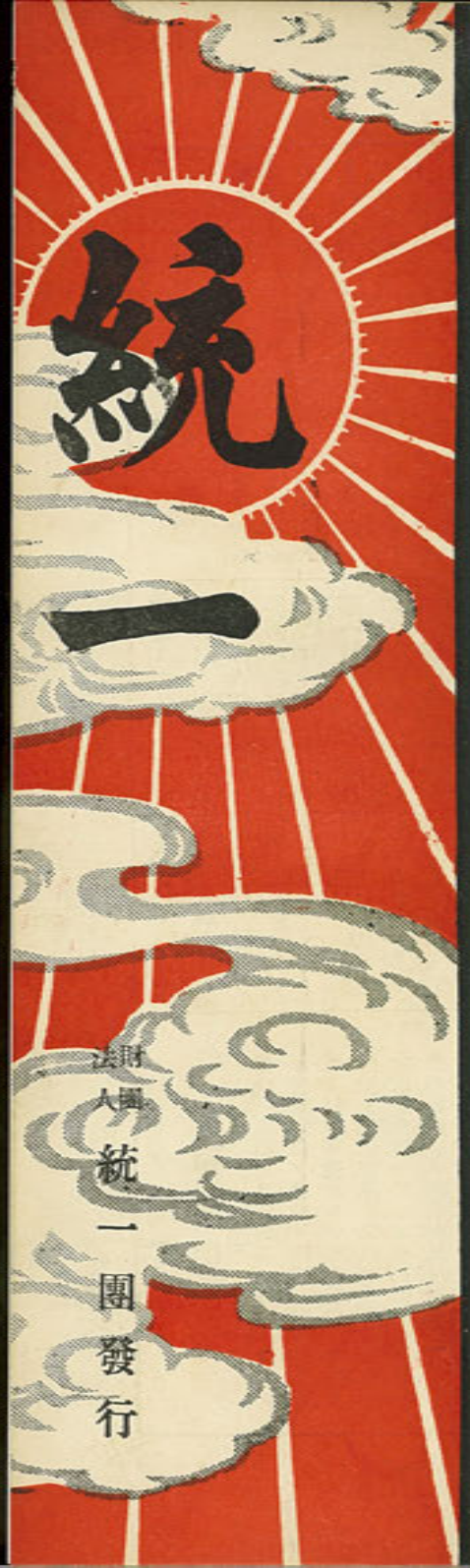


目次

本佛の感應（中篇）……日生上人
日蓮教學講座（第四回）……河合陟明
佛教は果して超國家的宗教か……本郷常次郎
法華經講話（第一講）……小林一郎
記事
○各地教信　○寄附團費誌料領收　○賀詞交換

第三十九年一月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間內ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ敎化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歷史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ每月統一ト敎トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ敎化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文敎ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト敎化トヲ守持スル事是レナリ

敎旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル敎學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮敎學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布敎並ニ敎化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ每年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎**贊助員**　一時金百圓以上又ハ每年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ每年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

奉祝皇太子殿下御誕生

大日本帝國九千萬同胞が待ちに待ち奉つた　皇太子殿下は、昭和八年十二月二十三日曉　大內山の松翠將に旭光に映えんとするの時しも、生れ出で給うた、津々浦々に至るまでひとしく寶祚萬歲皇統無窮の聲に漲り渡つた事である。畏くも天照大神　降つては神武のみかどより今年二千五百九十四年　天つ日嗣の御血系は、億兆一心盡忠報國の國民的赤誠の血潮の擁護し奉り來れる所而も實に國事多難なる今日、此の御慶事は、我國家に對する天の啓示とも拜察する。天壤と共に隆えまさむ神國日本の將來に、今我等臣民は皇統連綿をまのあたり見て、一入崇嚴の靈氣に打たれ、顧ては彌々皇國神聖の天業を輔翼し奉らん事を念ひ、暗澹たる妖雲を拂つて國難を打開し、東亞の盟主と爲つて正義を確立し、ゆいては天下に光宅して六合を照被する眞乎是れ　轉輪聖王の大理想を實現し奉るべく擧國邁往致さねばならぬ。「立正安國」「法國冥合」「王佛一乘」は實に之が根本的指導原理である。あゝ日本と法華經と日蓮聖人、聞け聖者の叫びを！「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず」

南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經

本佛の感應（中篇）

日生上人

そこで兎に角佛さまのことはいま申すやうな意味に於て、非常な尊い方であるといふことを考へれば宜しいのである。さうしてその佛が慈悲の光といふものをお發し下されるのである。慈悲の光といふのは、どうぞ救つてやりたい、護つてやりたいといふ御心といふものがいつも〳〵輝いて居るのである。お自我偈の結文にある通り「毎に自ら是の念を作す」と云つて、いつも〳〵救つてやりたいといふことを考へてお在でなさる。「是の念」といふのはどういふことかと云へば、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめんと」と云つて、どうぞして迷ひの衆生を救つて悟りの岸に達せしめてやりたいといふことで、この「何を以てか」といふことが一ばん有難いのである。阿彌陀さまのやうに四十八願と云つて四十八に限ればそれだけの救ひであるけれども、本佛はさうではない。「何を以てか」と云へば、四十八であらうが百であらうが五百であらうが、如何なる方法を以てゝも一切を包括して言はれるので「毎に自ら是の念を作す」といふことより以上にはもう無いのである。それを細かに說き分ければ一切經にある如き慈悲となつて居るのである。阿彌陀經に說いてあらうが、藥師經に說いて

あらうが、それはみなお釈迦さまの持つて居る慈悲の一部分を説明したもので、阿彌陀の四十八願でも藥師の十八願でも、それはみなお釈迦さまがそのときそのときの事情に依つて「まア阿彌陀はこのくらゐにやつて置かう」といつて四十八願を説き、「藥師はこのくらゐにしやうと」いつて十八願を説かれたもので、みなお釈迦さまがそれ以上の智慧と慈悲とを有つて居るから、いくらでも出て來たのである。なにも阿彌陀さまの方へ電報を打つて原稿を送つて貰つて、さうして四十八願を説いたわけでもなんでもない。そんなことを言ふものはみな無學な馬鹿が言ふのである、一切經は悉く釈尊の大智慧大慈悲のうちから現れたものである。さうして親切なことがあれば、それは全部釈尊の慈悲の發露に過ぎないのである。そのくらゐのことは人間の文化が進んだのであるから、今日の進んだる知識を以て了解しなければ、いつまで經つても夜は明けないといふものである。そんなわけのわからぬことをごとごとやつて居つてはいかぬといふところに、法華經といふものはあるのである。

その尊い佛さまの大慈大悲に吾々が接觸をするのはなんに依つてゐるかといふと、即ち吾等の信仰である。信仰といふのはそれを有難く考へるところの情操である。情操といふのは「なんとも有難いわけである、こちらはぼんやりして居つても佛はいつも護らうと御心配下さつて居る、子は親を忘れて居つても親は子を忘れないといふが如きものである」と、吾々がその佛の大慈大悲を自分の身にしみ〴〵と有難いと感激をしたその誓き、そのときがそれが感應と云つてこちらの精神に相通じて來るのである

こちらに有難いといふことが誓かなければ本佛の光はすぐそこまで來て居つてもそれが交通しないのである。

さうしてその情操といふものは、女の人がより多く持つて居るものである。殊に人間がいろ〳〵淋しさを感じたり、不仕合を感じたり、頼りなく感ずるとき、いつも佛は大慈大悲を以て吾等を護つて居られる。親と離れて寂しさを感じたときにも、親よりもより親切を持つて居られる佛はいまも離れず自分を護つて下さつて居る、夫よりも親切な方がいまも實在して吾々を護つて下される、不幸にして夫とは別れたところが佛は吾と離れない。かういふことになつて來るから、如何なるやさしい方、親切な方と分離したときでも、一方の佛とは永久に離れない。今日ばかりでない、これが永遠に離れないで自分と共に進んで行くといふことになるから、宗教の信心といふものは非常に有難いといふことがわかつて來るのである。

その情操といふものに感激が加はらなければ、決してほんとうの信仰また御利益といふことにはならないのである。御利益といふものはその感激、それが即ち御利益である、感激をして居るときに非常にいゝ氣分になつて、「もうこんな有難いことはない」といふ、その感激の涙に咽んで居るとき、その人は救はれても居るし慰められても居るし、そこに力もあり、そこに最高の幸福といふものがあるのである。人間の一番幸福を感ずるといふのは、自分の親なら親が親切な方である「ア、有難かつた」と思つて感

謝感激して居るときがその人の一ばん幸福な狀態である。夫なら夫は如何にも親切な人であつた、有難い夫であつたなと思つて涙を流して感謝して居るときの心理狀態が、なによりも一ばん自分の幸福ナンである。たゞ夫と一緒に壽司を食つたとか、芝居を觀たとかいふときは皮相的に嬉しいやうであるけれども、そのくらゐのことは大したものではない。人知れず自分が心のうちにその夫の親切に感謝して居るときが、一ばんその人の清い精神であり、且つ幸福な精神である、それ以上人間には幸福なことはない。「こんな嬉しいことはない」と悅んで居る、その精神以上に何物もないのである。それからお壽司が出たとか、なにがうまいとか云つても、お壽司ぐらゐのことはなんでもない、それはたゞ御飯の炊き工合がおいしく出來て居るとか、砂糖の加減がいゝとか、酢の加減がいゝとかいふくらゐのことで、それから番茶を飲んで、番茶がおいしかつたといふやうなわけで、大したものではない。そんなことぐらゐを以て人間が仕合せ仕合せといふならば、咽喉が渴いた時分には水が一ばんいゝ、腹が減つた時分には握り飯がいゝのであるから、そんな事はそのときそのときでなんでも人間の滿足といふものが得られる少しも心配はない。又寢て氣分が宜いといふやうなことでも、自分の心の持ちやうであるから、薄い蒲團の上に寢ても、これが地震で放り出され火事に燒出されて野宿しなければならぬことを思つたならば假令薄くとも家の中で蒲團を布いて寢るといふのは有難いことだと思へば、そこに非常な愉快がある。汽車の三等にでも乘れば頭をコツン〳〵ぶつゝけながら寢なければならぬのに、今日はちやんと柔かい

枕をして寢るのは愉快なことであるといふやうに、ちきに幸福といふものを感ずることが出來る、さういふことは自分の精神の置きやうでどうでもなる。それをどうもこれは蒲團が薄い、隣りの奧さんは蒲團を二枚も敷いて寢るといふのに自分は一枚ぢやといふやうなことを考へれば、不愉快になつて來るけれども、もう一軒置いて隣りの家では疊もなくて吳莚を敷いてその上に寢ころんで居るといふことを考へれば、蒲團を敷いて寢るといふことが嬉しくなるのであるから、さういふことは人間の精神の持ち方でどうでもなる。一ばん大事なのは人間の精神的の關係に於て、左樣に感謝して生涯を送ることが少なければ、不平と不滿を以て充たして、「彼奴は憎い奴だ、忌々しい奴だ、あんなことをされては堪らぬ」といふやうなことが次から次へと出て來る。人生といふものはこれが一番いやなことである。「あの人のことをこつちではこれほど親切に思ふて居るのに少しも考へないでぼかんとして居る怪しからぬ人だ」といふやうなことになつて、それが何べんでも精神に往來をして來る、考へるたびに不愉快でたまらない。それは、なにも男女關係ばかりではない、友達同志に於てもさういふことに依つて非常に不愉快を感ずるものである。

それをこの宗教の信仰を持つて居れば、さういふ不愉快の匹敵すべからざる强い悅びをいつも供給されて居るのである。朝顏を洗つたときに考へれば、自分は長い時間ぐつすり睡つたけれども、その間も恰度母親が病める子供の枕頭に夜の目も寢ずに看護して居るが如くに、本佛釋迦如來は吾がこの睡りの

裡にも大慈悲の憐れみを垂れて下さつて居つたのであるかと思へば、顏を洗ふて「南無妙法蓮華經」と唱へたときには、その感謝の裡に非常な悅びといふものがあるのである。何事に出遭つたときにも、さういふ風な感じが屢々起るほど宜いのであつて、悲しいにつけても「南無妙法蓮華經」と唱へて本佛の慈悲に感謝し、樂しいにつけても「南無妙法蓮華經」と唱へて本佛の慈悲に感謝し、一擧一動が本佛と離れざる所に於て、初て法華の信仰が完成して、その人は生涯を通じて非常な幸福であつて、氣持よく暮してゆくことが出來て、死んだら間違なく佛に成るといふ勝利者となることが出來るのである。それを本佛の感應と言ふのである。

さうむづかしいことではない、これは女の人の方がやりいゝのである。男の方はどうも情操といふものが女ほどには動きにくいところがある、男はくしや〳〵していろ〳〵用事が多いものであるから、どうしても氣が散るのである。女は家庭に居るからして、自分が家庭を整理さへして行けばさう複雜な關係はない、例へば手紙なら手紙を出すと云つても、女はせい〳〵月に五本か十本も出せば宜いのだけれども、男の方は毎日々々十本も二十本も手紙を出さなければならぬ。電話もかゝつて來る、いろ〳〵人も談判に來るといふやうなわけで、非常な複雜な生活をしてゆかなければならぬ。女の方は考へる時間も十分あるし、亭主がよそへ行つて歸りが晩いといふやうなときにも、欠伸ばかりして待つて居るからつまらぬと思ふけれども、その間にこの宗教の情操に依つて、或は宗教的の書物を讀んだりして訓練をすれば、「今夜も亭主が歸りが晩いので洵に都合がいゝ、早ければ無駄ばなしをしてしまふのだけれども」……といふやうに考へてゆくといふと、宗教といふものは非常に婦人を幸福にする力のあるものである。

さうして一ばん終ひはやはり婦人は夫と別れなければならぬのである、さうすると自分に息子があつても、それは嫁が來て別の部屋で寢てしまつて、自分は一人で冷たい所で寢なければならぬといふことになる。そのときに「いつまでもぐちやくちや喋つてうるさい、早く寢なさい」と云つて叱言を云つても、それはなか〳〵云ふ通りにならない。そこで氣がくしや〳〵して嫁にあたり散らす、さうかうして居るうちに自分も死んでゆくといふことになるのであるから、この人生の最後の幕といふものは、女は悲劇になるものである。そこに宗教を持つてさへ居つたならば、さういふ孤獨の生活に移つたときにも本佛は「噫汝は可哀相に頼りにした夫を亡ふたか」と云つて、慈悲の精神を一層強く現されて來から、そこに感謝の涙に咽ぶことが出來る。大體女の人が宗教を信じないなんといふのはどういふわけかと私は思つて居る、これは若い間の浮いた調子がぬけないのだらう、いよ〳〵といふ時分にはみな後悔をして死に居るのだらうと思ふ。併し後悔は先に立たずで後からさういふことを考へるけれどももう追ひつかない、「アヽやり損ふた」と思ふてみな死に居るのではないか。だから死んでからは非常に後悔をしてお婆さんでも「アヽお寺にお參りして置いたらよかつたのに」といふやうなことを考へるけれども、今更冥土から電報を打つにも電報料はなし、使を寄越したいにも使はなしといふやうなわけで、みないま

頃は非常に歎いて居るものではなからうかと思ふ。

女が宗教から遠ざかつて居るといふやうなことは、いまの時代だけである。昔から人類の歴史を考へたならば、日本に於ても女性がこの佛教のことに盡した人は非常に多いのである、また近い頃に至るまで、お寺のことでもなんでもみな婦人が世話をして居つた。現代式の西洋の物質文明、フランス式思想が這入つて來てから、女性が宗教から遠ざかるやうになつたのであるけれども、これは瞞されたのである。だから今日までさういふ風に女性を導いた人は婦人の敵である。それがために煩悶苦痛が非常に多くなつて來た、その證據はこの頃やる活動寫眞に映つて居ること、新派劇に現れて居ることはみなその通りである、たゞ總てがこれ悲劇哀話といふことになつて居る。それはなにも自然に生ずるものではない、みな宗教を棄てゝ居ることから起るのである、あの悲劇哀話の中に宗教心を持つて居る婦人が一人飛込んだならば、みなぶちこわれてしまふ、あの映畫もあの劇も、みな壞れてしもふものである。

そこに實に有難いところがあるのである。さういふことは今更言ふのが野暮なんであつて、きまりきつたことである。それであるから昔から一生懸命に掌を合せて拜んで居るのである。そこで私は今日は特に「南無妙法蓮華經」と唱へてそれが本佛の感應であるといふ、この點を明かにしたいと思つたのである。今まで申したやうなことは實は言はないでも宜いことである、そのくらゐのことはみなが知つて居つて呉れる方が話が早いのだけれども、なんべんでも往つたり來たりして同じことを言はなければならぬだけ實に厄介な話である。私が今日お話しやうと思つたのはそんなことではない、「南無妙法蓮華經」と言ひながらお釋迦さまを忘れてはいかぬ、題目を唱へればそこにお釋迦さまが自分のものとなつて來るといふことが、法華信者として非常な愉快なことで、私でなければ克く話の出來ぬ點がそこにあるのである。それをどの方面からでも話をする力を私は持つて居るが、いまはしばらく法華經の『信解品』と『藥草喩品』に現れて居る意味からして、これを徹底的にお話をして置きたいと思ふ。日蓮聖人は前に擧げた『松野女房御書』に言はれた通り、

南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懐まれ給ふ、始はしらねども漸く月重なれば心の佛夢に見え、悅ばしき心漸く出來し候べし、法門多しといへども止め候（稲荷遺文一九七九）

いろ／＼教に關してお話したいことはあるけれども、これが一ばん善いところであると言はれて「南無妙法蓮華經」と信じて居れば心のうちにお釋迦さまがズーッと現れて來ると言はれた。この點が忘れてならぬ所である、是が地明會に於ける私の演說であるといふことを忘れぬやうにして置かなければいかぬ。「南無妙法蓮華經」と信じ參らすれば心を宿として釋迦牟尼佛が懐まれ給ふといふ、この點である、これを他の坊さんに話をしてうまく答辯の出來ぬやうなものは、それはみなにせ坊主である。例へば近頃日眼とか云ふ人が東京で辻に立つて、破れた衣を着て演說をしたりなにかして居る、大變えらい坊さんであるといふことを新聞にも書いて居るが、あんなものはちつともえらくない。昨日も統一閣に來て

私は少しの間話をしたけれども、なんにも知らない滅茶々々のものである。さういふつまらぬものでも大道に立つて大聲を揚げて喋べれば、やはりなにかえらい坊さんかと思ふやうなわけであるから、世の中は碌でもない者が一ぱい居る、胡麻の灰みたやうなものが一ぱい居るのである。あなた方は幸に地明會に加はつて直接私からかういふ話を聽くことを得たのは、全くこれは善根功德の致すところである、非常にあなた方のために私は結構なことだと思つて居る、ほかで話をするやうなことは嘘ッぱちみたやうなことばかり言ふのである。お題目を信じ唱ふれば心に釋尊が現れてお出でになるといふことを、どこからでも話をする力を私が持つて居ると申した言葉を忘れずに置いて頂きたいと思ふ。

そこでいまはこの『信解品』と『藥草喩品』に付てお話をしたいと思ふ。日蓮聖人の御遺文の一節に現れたといふやうなことではなくして、法華經全體を貫き、廷ては佛教全體、宗教全體の意味に於て、是れが動かぬ大切な點であるといふことを私は十分に説明をして置きたいと考へる。

この『信解品』と『藥草喩品』といふのは、法華經の四番目と五番目にあたるお經である、『信解品』は釋迦如來が一通り法華經の意味合をお説きになつて、さうして尚ほわからぬ者のために譬を擧げてその意味を講釋なさつた。そこで初の法華經の説明のところで「舍利弗尊者」といふ人がそれを了解して非常に悦んだことを申上げ、それに從つて譬をお説き下さつたに付て「中根の四大聲聞」と云つて、四人の代表者が法華經の意味合を信解いたしましたといふことを説いたのがこの『信解品第四』である。

これは佛の説教ではないので、佛のお弟子が只今お説きになつた法華經の意味合に付て、自分は斯樣に信じ且つ解しましたといふことを申上げたのである。あなた方でもほんとうは教を聽けば、この信解といふことを明かにしなければならぬのである。いまは日本では説教を聽いてもみな默つて歸るけれども、お經の方では説教を聽いたら必ずその中の代表者が出て、「只今のお話の意味はかう聽きました——今日は　南無妙法蓮華經　と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懐まれ給ふ　といふことでありました。ほかの坊さんは容易に説かぬけれども、あなたは此事に付て縱横無盡に説くといふことであるからして非常な期待を以て私共は拜聽したのであります」といふやうなことから、話が二度繰返されるから、今度はびつたり大勢の人の頭にも這入るのである。さうしてその了解をした言葉に缺點があつたならばお釋迦さまの方からそれはお前の了解にはまだ足らぬところがあるといふので、第二回の説明が出て來るやうになるのである。それが非常に善かつたら大に褒めて頂いて、俺の話した通り少しも違はぬやうに了解をした、感心な者だといふことになつて來る。その信解品の意味合を最初にお話をしやうと思ふ。

大體この信解品は「長者窮子の譬」と申しますが、金持と、金持の子供が乞食になつた譬が出て居る、それでいまお經に就て親切にお話をして、その意味を克く領解して置きたいと考へる。（未續）

日蓮教學講座（第四回）

文學士　河合陟明

★★★★

我が淨けき土は毀れねど、衆生は惡しき業の爲、量り無き劫を重ぬるも、三寶の御名をば得ぞ聞かじ。されど功德を積み修め、質和かに直き者は、我身の常に此處にして法をば說くを見るならん、此の善き佛子の爲にこそ、佛壽量りも無しと說く、是れその久しく修めたる、道の功德の賜ぞかし。

（妙法蓮華經）

★★★★

第一章　佛陀の人格的諸相

第一節　佛陀の恩德（續）

慈父大聖世尊が世に出でまして、威德天が下を動かし給ひ、御名の顯れ給ふ事雪山の如く、香りの微妙じき事は蓮の華にも比へつべく、圓滿の面貌と寂靜の態度、山の如き威嚴と海の如き慈悲の相好とは一度び世尊を見奉る者をして立所に菩提の大善心を發さしめ、其の御光を拜むに日の始めて出でたる如く、月の大空に遊ぶが如く、此の慈智の光明もて此の世を照し、諸人に明けき眼を施し、諸の疑を拂ひて淨けき三寶の信に入らしめ給ふたのであつた。誠に世の人の敎の師、救ひの主、我が心の御親にましして、弟子達は皆尊み親んで世尊よ、世尊よ、と呼び奉り事へ奉つたのであつた。而も此の敬ひ懷しみ限り無かりし敎の師父が、一期の妙化圓かに終らせ給へりとはいへ、今や遂にみまかり給ふと聞いては驚き悲しみに堪へず、慕はしさに堪へず、五體を地に投げ聲を擧げて泣き叫び、急ぎ世尊の御許に詣でゝ御足を禮して申し上ぐるやう、「世尊よ、世尊は何故に斯くまで早く滅度に入り給ふのでありませうか、今もし世尊がお逝れになるならば、世の人々は其の眼を失ふた樣に再び無明の闇路に迷ふでありませう、さすれば如何して御敎の道を辨へる事ができるでありませう、世尊よ、願はくは此世に住まつて滅度にお入り下さいますな、どうか何時までも私達をお導き下さい、唯願はくは一劫たりとも御壽命を此世にお止め下さい」と斯樣に三度びまでも請ひ奉つたのであつた。世尊はまことに此の懇願を哀れと思召されつゝ、切々たる慈訓を垂れて、一面には人生の無常を說き、佛と雖も人として出で來し此の身は生滅無常の有爲轉變を免れざるを示し、他面にはさりながら是れ如來の妙化にして、佛常に衆生の眼前に在らば、衆は却つて等閑の思を發し、世尊を尊ばず、佛に慣れ、放逸にして五欲に執着して惡道の中に墮つるであらう、如來は之を鑑みて衆生を惑むが爲の故に却つて非滅の滅を示し、衆生をして佛を戀慕渴仰せしめ、値遇し奉る事難きを思ふて、一心に善根功德を積み修め、意柔和質直にしてみ法に身命を惜まざるに至らばかゝる淳善の佛子には、佛壽無量眞身不滅にして常住の救護妙化を存續するを見る事を得んてふこよなき福音を宣べ置き給ふたのであつた。眞に世尊入涅槃の問題は在世の佛弟子にとつても我等後世の信仰者にとつても、最も大事なる事柄である、我等が今熱誠不斷の信仰を捧ぐるのは、實に此の涅槃し給ひし御佛に對してゞある。如來大涅槃の境界は如何なるものに在しますの

であらうか。佛陀の人格實在と其の濟度活動は如何なるものに在しますのであらうか。世尊滅後の佛教は寔に此の如來の眞身を憧憬する佛身論と、其の實在の狀態を探求する涅槃論との、兩者乃至其の統一を以て根本問題と爲し、ひたすら其の圓滿なる解決を要求して止まなかつたのである。其の最後の眞趣は、前回に一言したる「本佛釋尊應身常住の妙化」といふ日蓮聖人畢生の大主張たる最高の信仰思想であるが、私は此の理を、今後回を重ぬるにつれて次第に講明し論述せんとするに臨み、今一度世尊の在りし日の溫情溢るゝ慈訓垂誡を追懷して、そゝろに世尊の人格を偲び尊容を慕ひ、以て今も尙我が爲に實在し給ふ世尊の人格を念するのよすがとし、又以て世尊が佛身自己の不滅常樂に關し、更には我等の得道得果に關して、如何に永遠の福音を惠み道し給ひしかをつらねて見よう。

世尊が涅槃の夕に臨んで諸の弟子達に諭し給ひし御教は次のやうであつた。

「弟子等よ、汝等憂と悲とを懷いてはならぬ、世は無常である、牢く强くて永久に變らぬものとては一つも無い、肉身は脆い、丁度電の樣である、天上界の諸の衆生も死に行けば、天が下なる王者すらも死は避けられぬ、貧しきと富めると貴きと賤しきとの異りはあつても、生れて死なぬものとては一人とて無い、青春には老があり、健康には病があり生存には死があり、愛づる者とは別れねばならぬ、變るべきものを變らせまいとする事は出來ぬ、唯佛の道に順ふ者のみ能く永への滅びざる安穩に到る事が出來る。されば汝等は憂を捨てゝ、私が汝等の爲に最後に語る所を靜かに聞くがよい。悲しんではならぬ、どの樣に悲しんでもなべての生きとし生ける者は皆悉く常無い、たとへ今一劫壽命を延ばした所で、矢張り一度びは死なねばならぬ。弟子等よ、須彌山は高くとも遂には崩れ、大海原は深くとも又必

ず涸れる時が來る、大地は堅うして總ての物を載せて居るが、劫盡きて業火燃え出る時は又滅びて行かねばならぬ、會ふ者は皆別れる、汝等よ、たゞ私の事に就て其樣に憂へ惱んで呉れるな、私は今汝等に最後の教を示すであらう」

人々は此のお言葉を聞いて一入に悲しみ泣き、地に臥し胸を打つて叫び悶えた、さうして漸くにして悲みを抑へて申すやう、

「世尊よ、どうぞお說き下さい、私共はきつと御教のまゝに行ふでありませう……」

世尊宣ふやう、

「弟子等よ、汝等は歡び和いで共に道にいそしまねばならぬ、先づ其の心を淨くせよ、心を淸めれば道は自然に得られる。佛は凡ての道を汝等に示した始終說いた所は皆人々の胸の中に在る、汝等は唯之を行ふがよい、さすれば私は何時でも弟子等の心の中に生きて居る。弟子等よ、私は世に出でゝ普く涅槃の大道を開き、迷の根を絕つた、汝等は私の去つた後は此の法を棄てゝ呉れるな。

弟子等よ、若し私の逝いた後に、能く眞實に教道を修めるものがあるならば、汝等よ、是こそ私の眞の弟子、私の子孫である、彼は此上無い證の位に昇るであらう。私は天上天下に住まふあらゆる人の身を憂へて、君王の位を捨てゝ出家と爲り、今は法王として佛如來と爲つてなべての世を救ふた、汝等も宜しく其の身を憂へて急ぎ衆の惡を斷つが善い。

弟子等よ、一切の生きとし生ける物に慈みを加へよ、人の死んだ時は之を哀れめ、死に行く人は途を知らず、歎き悲む人々も亦其の赴く所を知らない唯道を得た者だけが深く之を知るのみである、佛は此の爲に世に出でゝ教を宣べた、教は學び、道は行はれねばならぬ。天下には道は多い、その中に於ても王法は大きなものである、然し佛の道は更に高いものである。

汝等よ、佛の世に出るのは甚だ希である、善く佛の正法を宣べる者も甚だ希に、聞いて信ずる者も甚だ希である、能く佛の正法を成し遂げる者も甚だ希に、そして佛の正法の恩に報ゆる事を知る者も甚だ希である。汝等よ、師に順であれ、其前にては敬ひ陰にては稱へ、其身去つた後は常に之を念ふが善い私は今日の夜半にまさに滅度に入るであらう。」

並み居る人々は再び復も此の御語を聞いては悲痛を忍んで啜び泣いた。

世尊は愁に諭し給ふやう、

「弟子等よ、且く憂へ悲む事を止めて、靜かに我が教を聞くが善い、弟子等よ、譬へば此に人有つて月の隱れたのを見て月は無くなつたと思つたならば其は正しいであらうか、此の月の性は實には沒する事無く、轉じて他方に現れ、其時彼處の衆生は復月が出たと謂ふであらう。而も此の月の性は實には出づる事も無い、只須彌山に障へらるゝが故に現れなくなる計りである。其の月の實の性や體は去る事も來る事も出づる事も沒する事も無い、佛正徧智者も亦是の如くである、出で生れ、隱れ滅びると見るはたゞ衆生の心に因るのであつて、佛には實に生滅は無いのである。

弟子等よ、譬へば菴羅樹や圖浮樹は、一年に三度び變じ、或時は葉を生じて青々と茂り、又時には凋み落ちて枯れて了つた樣になる、然し此の樹は實には枯死んだものでは無い、如來の身も亦是に同じい、衆生に應同して人界に出でた此の「應身」と、その根本である久遠の太古より覺の大果報に住して居る常住の「報身」と、今や涅槃に入つて不滅常住の「法身」となるとの此の三種の身を示現するも、此の三度びの變りは只表面の相違のみであつて、其の本身は不變常住である、佛の身は常に一つであつて、然も此の三方面があり、三方面があつても常に一身である

之を如來のいと深き秘密の身といふのである。されば如來の方便涅槃を見て無常なりと思ふのは、彼の樹の時あつて凋落せるのを見て、實に枯死せりと爲すが如く、謂れ無き事であるを知らねばならぬ。

弟子等よ、若し如來の常住は須彌山の如しと言ふならば、須彌山も猶劫火起つて此世界が燒け盡きん時には同じく燒け崩れて了ふであらう、然し如來は如何して之と同じく壞れ滅びる樣な事があらうぞ、弟子等よ、汝等は今應に此かる事を考へてはならぬ弟子等よ、宇宙の一切の萬有は、唯涅槃の境界を除いては、更に一物として眞に常住不變なるものは無い、佛は實に此の常住の涅槃を體とるが故に亦常住であるのである。弟子等よ、たとへ須彌山が崩れ落ちる時でも、大海も灰と爲つて亦飛ぶ時でも、此世界に劫火起つて燒け盡きる時でも、佛は永へに滅びざる安穩の處に住つて、莊嚴の淨土に遊樂して居るのである。

弟子等よ、私は已に久しく此の大きな涅槃の淨らかな土に住んで、此の世界に於て種々の神通を現はした。藍毗尼の國に於ては母摩耶より生まるゝ事を示し、人々は驚き喜んで私を嬰兒と言つた。然し私は久遠の昔よりこのかた人間の運命を離れて居る、たゞ世間の約束に從つて之を示したまでとある。佛の身は是れ法性の身であつて、壞れ滅ぶる肉、血、骨などから成るものではない、又私が家を出でゝ道を修めた時でも、人は皆悉達太子が初めて家を出でたと言ひ、菩提樹の下に坐つて衆の魔を降伏し覺を開いた時でも、人は皆私を以て初めて降魔し初めて無上道を成就して覺を開いたと言つて居る。けれども私は已に量り無き久しく遠い昔より法の王と成り、無上の覺を開いて衆の魔を降して居たのである。さうして今に至るまで、此の世界に在つて數〻滅度を示した。人々は皆、佛が眞實に滅れたと考へた、けれども佛の身は實に永へに滅びない、是ぞ

佛の眞の身こそ常住の法であると知るがよい、弟子等よ、涅槃は是れ諸〳〵の佛の常住の法界である。

弟子等よ、佛は此世に現れて、果敢無き世を迷ひ貪る諸〳〵の人々の爲に、此上無く微妙じき法を授け此こそ眞の樂であり、煩惱を斷ち迷を解脫する正しい道であると敎へ、世の人々の師と爲つて、諸〳〵の賤しい人々の中に入つて法を說いたけれども、是れ唯彼等を助け救はうと思ふが爲にこそであつて、惡業に因つて此身を受けたのでは無い、佛の正覺は常に此樣に安かに大きな涅槃に住んで居る。其故常住であつて變らぬのである。其故之を大涅槃と名ける若し道を求め道を修める人が此に住む事ができたならば、能く此の大なる神通を顯し示して畏る、所が無いであらう。

弟子等よ、佛の法身は常に住り壞れる事は無い、其は金剛の身であつて、食で保つ身では無い、人間の身では無く、恐怖ある身では無く、即ち是れ法性の身である、然し今病の苦を示して變て涅槃に入るは、之に依つて人々の心を調へ、佛を戀ひ慕はしめて道を修め覺らせやうと欲ふからである。

弟子等よ、佛は常に住つて滅びず變らないと信ずる者があるならば、佛は即ち其の人の身の中にも宿つて居るのである。弟子等よ、佛の身には煩惱が滅び終つて即ち涅槃が在るのみである。鐵は冷かにして復熱うする事ができるけれども、佛はさうではない、煩惱を斷ち了つて永へに清涼に爲つて居る煩惱の炎はまたと起る事は無い。知れよ、人々は鐵のやう、佛は煩惱を漏らさぬ智慧の火を以て、一切の人々の煩惱の鐵を燒くのである。弟子等よ、王が時には其の奧園に遊んで、諸の綵女の間に居なくなつても、王は死なれたと言ふ事はできない。佛も亦其通りで、此世に見えなくなつても常無いものであるとは言はれない、實に佛は量り無い煩惱を出で極り無い迷を全く解脫して、常住に樂しい涅槃に入り、諸〳〵の覺の花や果の間に遊んで居るのである。

弟子等よ、私は今汝等の爲に、末の世に至るまで苦毒の樹を變へて、甘露の果を結ばしめる樣にと願ふ、汝等は此法の中で相和ぎ相敬うて諍訟を起してはならぬ。汝等は同一の師から受け繼いだのである水と乳との樣に睦み合へ、油と水との樣に爭ふて呉れるな、宜しく佛の法を守つて倶に學び、榮と樂とを同じうして是れ、心を要らざる事に使ふて、命を無駄に耗す事無く、覺の花の精を食べ、道の果を熟らし、次で世の中をして總て此の果に腹膨らせる樣に努めて呉れ、弟子等よ、私は自ら覺つて他の爲に說いた、此の法は能く汝等をして解脫に到らしめるであらう。汝等は能く受け能く辨へて事每に善く行ふがよい。

弟子等よ、世は皆常無い、此身は常に憂があり、苦の集る所であり、やがては死に行かねばならぬ弟子等よ、佛は是等の凡てを離れて眞實を證り諸〳〵の苦を解脫して居る。佛には老も病も死も無い、弟子等よ、私は汝等凡てを惑めばこそ今滅度に入らうとするのである。世の人は、佛の常に世に在ますを見れば、却つて放逸になり五欲に執着して惡道に墮つるであらう。其爲に佛は量り無い大慈悲の方便を以て滅度を示し、人々をして佛に難遭の想を起さしめ、恭敬の心を以て一心に佛を戀ひ慕はしめて清淨な道に導き入れるのである。

弟子等よ、佛の壽命は諸〳〵の壽命の中に於て此上も無く勝れて居る、其の得たる法は諸〳〵の法の中で第一である。弟子等よ、此國に八つの大きな河がある、又數限り無く小さな川がある、然し何れも歸する所は大海である樣に、一切の人々の壽命の河も歸する所は佛命の大海である。其故佛の壽命は量り無い。又弟子等よ、譬へば阿耨達池が四つの大きな河を出す樣に、佛も亦一切の壽命を出す源である、又譬へば諸〳〵の藥の中に醍醐が其の第一である樣に

佛は人々の中で壽命の第一である。佛は是れ常の法常の壽命である事を知るがよい。然し人々を救はう爲には、煩惱を伴ふ身を示して、滅度に入る事を示すのである。弟子等よ、汝等は勤めて此の第一義の理を修めて、廣く人の爲に宣べるがよい、さうしたならば佛の行く所に從ひ佛の至る處に至る事ができるであらう。弟子等よ、汝等は清らかであつて呉れ、常に解脱を求めて放逸になつて呉れるな。今や私の此世の生涯は圓かに過ぎた、汝等は此世に殘れ、私は今、思のまゝに滅びざる安穩の處に到るのである。汝等慎み滅めて自ら其心を護らねばならぬ弟子等よ、心は能く人と爲り、畜生となり、餓鬼となり地獄となりして、六道の迷の世を作るが、又證を開いて美しい佛とも成る事が出來るのである。

弟子等よ、故に汝等は當に心を正しくして道を行はねばならぬ、唯道を行ふ者のみが能く永に安穩を得られる。斯くて私の說き敎へた道が久しく世に存へて世間を救ひ人々を導き、凡てのものを息はしめる事が出來るのである。

弟子等よ、譬へば諸の藥草が能く人々を惠む樣に、佛の法は妙なる甘露を出して人々の煩惱の病を救ふのである。今私の子である在家出家の弟子等をして、悉く佛の秘密の藏の中に憩はしめよう。私も當に此中に憩うて滅度に入るのである、其の秘密の藏とは何であるか、佛の實在の法身、般若の智慧、解脱の神力といふ此の涅槃の三德が即ち之である。其の法身の體性相は本より常住のものであつて、生せず滅せず、又途中より生ずるものでもない、堅固にして動せず變ぜず、眞に善き微妙の色身を佛は有つて居るのである、さうして般若といひ、又一切種智といふ大いなる證の智慧を受け樂しみ、なべての人も物も悉く照し見て、煩惱を解脱したる自在の威神力を以て、是等一切を救ふ大慈悲の働きを爲す、弟子等よ、佛の法身は常住のもの、涅槃は永世の樂み、佛の自在の働きは永世の我であり、佛の正法は永世に清淨なものである。「我」といふは佛の義、「常」といふは法身の義、「樂」といふは涅槃の義、「淨」といふは正法の義である。弟子等よ、佛は涅槃の中に在つても限り無い慈悲を以て一切の人々を救ふ働きを續けて居る事を忘れてはならぬ。

弟子等よ、私の上無き正法は永へに世に傳はる、佛が諸の人々を安らかにする樣に、佛の遺法も亦汝等を安らかにするであらう。汝等必ず勤めて何處に在つても毎に「常樂我淨」の想を修めるがよい

弟子等よ、世には諸の敎が多い、弟子等よ、さりながら明かに知れ、我が佛の敎こそ世を救ふ淨らかな道である、汝等は諸人の幸福の爲、又世の中の隆昌の爲に、之を修め之を傳へるがよい、弟子等よ此の佛の道は諸の善の源である、是を以て心を修め、貪らず爭はず詐らず、戯れず嫉まず慢らず智慧と慈愛と恭敬の眼を以て、私の肉體よりも尊い法性の眞身を見るがよい、諦かに私の常住の眞身を見る者こそは、私がまのあたり此世に在つて、當に其側から離れて居らぬ事に氣附くであらう。

弟子等よ、佛は常に住る、弟子等よ、佛は永への身であれば、即ち永へに歸依する事が出來るのである。汝等は徒らに悲しんではならぬ。汝等は今から死に至るまで勤めて我が敎を持ち、人の眼を護る樣にするがよい、心を直して功德を積み、己が身を憂へ、又人の身を憂へて世を救うて呉れよ、さすれば常に佛を見る事が出來るであらう。

弟子等よ、汝等は歡び和いで共に相論し合ひ、應當に此法に順つて、深く因果の理を學び、唯一つの實の道を信じ、佛は滅び給はぬ事を知れよ、此人こそは實にこよなき莊嚴を着た人である。佛は常に此人を護るであらう。此人は久しからずして必ず道を成し遂げる事が出來るのである。

弟子等よ、さらば我が論は終つた、汝等死に至る

まで生涯これを受け持つがよい……」

あゝ大涅槃の夜に娑羅樹の林の中にして、縷々として說き給ふ世尊の御諭の如何に惻々として私達の心を打つ事であらうか、私はたゞ無限の思に乾るばかりである。あゝ而も又世尊のいとも懇に說き給ふ佛身常住の御教こそ、又我が成佛得道の御教こそ、如何に私達に尊い悅ばしい福音であらうか、此の福音を宣べ給ひし——曾ては世に出でゝ御姿のまゝ今尙常に妙色湛然として住したまふ「微妙の淨き法身相三十二を具へ、八十種好を以て用て法身を莊嚴したまへり」あゝ世尊柔輭の御姿——端嚴の尊形、慈悲の溫容……今慈眼もて我を攝し給ふて居る……

大覺世尊の三十二相八十種好、紫磨金色の粧ひ嚴しくして、迦陵頻の御音を以て一切衆生を皆佛に成し給はんと御經を說かせ給ふ慈悲深重におはします佛の御餘波惜み進らする歎き思ひ遣るに……

乃至法華經ノ第七ニ云ク 於我滅度後應受持此經 是人於佛道決定無有疑云云。此文こそよによに遺敷候へ。（日蓮聖人身延山御書）

南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ、始は知らねども漸く月重なれば心の佛夢に見え悅ばしき心漸く出來し候べし。（日蓮聖人 松野女房御書）

法華經を信ずる心は即ち活ける佛陀に對する信仰渴仰である故、聖語に示し給へる如く、我等の精神の內に活ける佛陀の下り給ふのである、誠に御佛は我が活ける信仰の心の內に姙まれ給ふ……

暮れ行く空の雲の色 有明方の月の光までも心を催す思なり（持妙法華問答鈔）

夕暮の雲の色彩を眺め、有明方の月の淸光を仰ぐの時、信仰の眼に映ずる其の自然美は、そこに實在の佛陀を聯想して渴仰の泉に新鮮なる靈水を湛へ、歡喜の園に淸香の花を開くであらう。

佛の入滅は既に二千餘年を經たり、然りと雖も法華經を信ずる者の許に佛の音聲を留て時々刻々念々に我れ死せざる由を聞かしめたまふ（守護國家論）

あゝ慈父大覺世尊大悲の妙化は、結晶して妙法の文字音聲となり、佛陀の力慈悲の光は我等を常に每に攝護し給ふ、佛子よ明かに知れ、此の世界に光臨して此の世界に滅度を示されし我が釋迦牟尼佛は、是ぞ無始久遠より常住實在の本佛にましまして、我等の前には今現り昭々として惠光を放ち、絕えず劉琬たる妙音を送り給ふて居るのである。我等の大聖世尊に感謝す可きは、曾に佛敎の開說者として之を見るべきのみに非ず、現時も將來も久遠の過去より永劫の未來に至るまで、一切衆生の救護者として感應主として、大施主として、攝取者として信賴し奉る可きを確信するに在るのである。佛敎唯一の要義は、實に如來の秘密神通の力生を現はし滅を示すも、是れ決して眞の生に非ず滅に非ず、如來は常住に實在して三世に十方に全法界に周遍無窮の大利潤を施し給へる事を信受し奉るに在つて存するのである。妙法華經に云く、

是の如く我れ成佛してより已來甚だ大いに久遠なり、壽命無量阿僧祇劫常住にして滅せず。

抑も我等が宗敎的希望は永遠の實在に到達するに在る。蓋し凝然無爲の理法に歸して何等の活動をも爲さゞる境遇に於て永存するとも、其は到底我等が希望を滿たす所以ではない、我等は勇健奮迅の大作用を活現し得べき微妙尊特の本體を顯發し得て、永遠に實在せん事を期するのである。永き眠に就かんとするのではない、凡ての束縛を脫して大自在の應現を試みんと欲するのである。理法の穴に葬られんとするにはあらで、智悲の園に遊ばん事を願へるのである。所以ある哉、佛敎究竟の妙旨を明せし法華經には、常住の理法を包括して古今に實在せる本佛あるを證し、しかのみならず我等も亦實に此の實在

の佛たる可き本能本具の妙體たるを論じて、據つて以て此地位に登昇し得べき唯一無上の方法を懇諭せられて居るのである。夫れ斯くの如く現實出現の釋迦牟尼佛即是れ本有常住の本覺佛にして、今尚ほ現に我等を慈愍し給ふのみならず、我等が開覺得道の日は、其の慈悲の温顔を見奉る事を得、其の微妙の尊容を拜する事を得て、無限の愛護を被るものたるを證せられて居る。經に、「一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず、時に我れ及び衆僧俱に靈鷲山に出づ、我れ時に衆生に語る、常に此に在つて滅せず、……我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり寶樹華果多くして衆生の遊樂する所なり諸天天鼓を擊つて常に衆の伎樂を作し、曼荼羅華を雨して佛及び大衆に散ず」と誠に懇に約束し給へるは正しく此意であるのである。而て此の本佛大慈の救ひの御手として、佛の智悲神通一切の功德力を一言の妙法の聲字に籠めて我等佛子に回向し施與し給ふたのである。されば日蓮聖人の妙敎は、明かに本佛釋尊人格實在の智悲一體の圓慈を光顯し、之を中心とし之より發して慈悲功德の淨用妙化感應不斷に相通じては我等眼に妙法五字七字の文字を拜する時そこに本佛の實在を聯想し、耳に妙法一言の音聲を聞く時そこに本佛の大慈悲を憶念し、本佛因行の萬善果上の萬德我が手に歸するを確信し、以て時々刻々念々に本佛大慈の妙化に攝護せられ居る事を感ぜしめ、こゝに歡喜の心、平和の心、滿足の心、渴仰の心、慈悲の心等を發して、現當二世幾多無限の靈應を感得せしむるものである。あゝ世尊涅槃し給へども佛身在せり、我等佛子たるもの如何にして本佛世尊威神の力と智悲の光明とに對して滿腔の渴仰を捧げずして止み得るであらうぞ、

夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり所謂主師親これなり。(開目鈔)

世尊は甚だ希有にして値遇したてまつることを得べきこと難し、無量の功德を具へて能く一切を救護したまふ。(妙法蓮華經　化城喩品)

如來、今諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す。(妙法蓮華經　從地涌出品)

釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へ給ふ、四大聲聞の領解に云く、無上の寶珠求めざるに自ら得たり云々。(觀心本尊鈔)

此佛の御功德をば法華經を信ずる人に讓り給ふ例せば悲母の食ふ物の乳となりて赤子を養ふが如し今此の三界は皆是我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり等云々敎主釋尊は此功德を法華經の文字となして一切衆生の口に嘗めさせ給ふ、赤子の水火を辨へず、毒と藥とを知らざれども、乳を含めば身命をつなぐが如し。(法蓮鈔)

譬へば高き岸の下に人ありて登ること能はざらんに、又岸の上に人ありて綱を下して、此の綱にとりつかば我れ岸の上に引登さんと云はんに、引く人の力を疑ひ、綱の弱からん事をあやぶみて、手を納めて是を取らざらんが如し、爭か岸の上に登る事を得べき、若し其語に隨ひて、手を延べ是を取らんには即ち登る事を得べし、唯我一人能爲救護の佛の御力を疑ひ、以信得入の法華經の敎の綱をあやぶみて決定無有疑の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず、菩提の岸に登る事難し、不信の者は墮罪泥梨の根元なり。(持妙法華問答鈔)

佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此珠を裹みて末代幼稚の頸に懸さしめたまふ。(觀心本尊鈔)

汝等智有らん者此に於て疑を生ずること勿れ、當に斷じて永く盡くさしむべし、佛語は實にして虛しからず、我も亦爲世の父諸の苦患を救ふ者なり。(妙法蓮華經　如來壽量品)

南無妙法蓮華經。(續)

佛教は果して超國家的宗教か

（「佛耶兩教の優劣」の批判）

本郷常次郎

頃日某新聞紙上に於ける、佛耶兩教爭論に對する某氏の批判を讀みて、其の感想の一端を記す。

第一に爭論の當事者基督者が、佛教は女性賤視の宗教であるからいけない、と論じて居るのに對し、片一方の佛教家は佛教は決して女性賤視の宗教でないことを論じて居るのは、大に好し、されどその邊まで論證されたか、余は其の本文を見ないから知らないが、げに基督者の云ふが如く、同じ佛教でもある時には儒教の「女子と小人とは養ひ難し」と云ふ格で、女人にお氣の毒なやうなことを仰せになつて居ることもある。即ち『女人は地獄の使なり能く佛の種子を斷ず、外面は菩薩に似て內心夜叉の如し』（華嚴經）とか、『三世の諸佛の眼は拔けて大地に落つるも、法界の女人は永く成佛の期無し』（銀色女經）と女人の五障三從の罪深きを戒められて居る、併しそれは寧ろ男子へ對する警告なんである。されば法華經に來りて「提婆品」に女人成佛の見本を示され、女人も男子と同等の資格を具することを明瞭に說かれたのである。此の事を宗祖は「開目鈔」に『龍女が成佛此れ一人にはあらず、一切の女人の成佛をあらはす、法華已前の諸の小乘經には女人の成佛をゆるさず、諸の大乘經には成佛往生をゆるすやうなれども或は改轉の成佛にして一念三千の成佛にあらざれば有名無實の成佛往生なり、擧一例諸と申して龍女が成佛は末代の女人の成佛往生の道をふみわけたるなるべし』と仰せられてある。又御妙判諸所に『女人となる事は物に隨ふて物を隨ふる身也』（兄弟鈔）とも、『矢のはしるは弓の力、雲のゆくことは龍のちから、男のしわざは女のちからなり』（富木尼御書）とも『男は柱の如く女は桁の如し、男は足の如く女は身の如し、男は羽の如く女は身の如し』（阿佛房御書）とも、上人は女人の爲に萬丈の氣焰をあげて居られる「涅槃經」に云く『若能く自ら佛性有りと知る者は我是人を說いて丈夫の相と爲す、若女人ありて能く自身に定めて佛性ありと知らば當に知るべし是等は即ち是れ男子なり』と、まさに然かなり、法華經に因つて救はれたる女性は是れ丈夫である男子である。故に唯爾前諸經の一部分ばかりを見て、佛耶兩教の優劣を論ずるは甚だ早計に失する嫌なきを如何せんやである。法華經以外の諸經に於てさへ、釋尊は女人の爲めに男子に對して猛省を促されたこともある佛教は決して偏狹排他の教ではない。

次に論者は「佛教が沈潛的であるに對して基督教は活動的、佛教が宇宙的であるに對して基督教は社會的となつた、……佛教よりも基督教の方が現代的の生命を持つ、乃至現代の社會に對し改造の情熱に燃えるものは、たゞ基督を模倣することにより、すべての犧牲を拂つて惜むところのない光と熱とを得るであらう。」と云ふて居られるが、成程これまでの佛教徒は沈潛的であつたかも知れない、否現在でも佛教者は退嬰的であるかも知れない、然し一つの佛教にも多種多樣の佛教があることを看過してはならない、其の基く所の經典が現代的でないならば其の經典を奉ずる宗派も亦非現代的になるのも亦止むを得まい、但し一宗一派の佛教が非活動的であるとしても、それを以て佛教全般を批判することは、これも亦早計である。佛教中には基督教以上に現代及び將來の生命を持つ活潑々地の本化別頭の佛教があることを御存じないのか、基督者は基督を以て唯一の犧牲的精神の體驗者、光と熱との所有者と思はるゝのは無理からぬ所ではあるが、井蛙大海を知らざる者、モ少し廣く眼界を轉ずる時に吾々祖國の先輩に、それよりもヨリ以上の不惜身命の行者、大智慧者、大慈悲者、體驗者、犧牲者日蓮を有することを吾々日本人は夢寐にも忘れてはならない。「法華經勸持品」に曰く『濁劫惡世中多有諸恐怖　惡鬼入其

身」罵」詈」毀」辱我」我等敬」信佛」當」著」忍辱鎧」爲」說」是經」故忍」此諸難事」我不」愛」身命」但惜」無上道」」「壽量品」に曰く「「一心欲」見」佛不」自惜」身命」」「安樂行品」に曰く「「遊」行無畏如」獅子王」」「涌出品」に曰く「「汝等當」共一心」被」精進鎧」發」堅固意」乃至諸佛師子奮迅之力。諸佛威猛大勢之力」」云々經文明々赫々誰か敢て之を疑はん。宗祖又「如說修行鈔」に弟子檀那を激勵して「何に强敵重なるとも努々退く心なく恐るゝ心なかれ。縱ひ頸をば鋸にて引切り、胴をば稜鋒を以て突き、足には錠を打ちて錐を以てもむとも、命のかよはんほどは、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死せよ」」云々と壯烈鬼神をも泣かしめ、百世の下懦夫をして起たしむる概があるではないか、なんでこれを沈潛的退嬰的と云へやう。だが、それかといつて、……たゝ革命の情熱の燃えるといつても、彼の血盟團や、死なう團等の如きテロ行爲をいまこゝに是認するのではない。日蓮のどこを叩いてもテロ行爲の許容せられる何物もない、否寧ろテロの甘受者であつたのである、テロ以上の大建設方案ある指導精神の所有者であつたことを附記して置く。

又「佛教が宇宙的であるに對し、基督教は社會的」云々。とは佛教の宇宙觀殊に法華經のそれが完備せるは云ふまでもないことであるが、それと同時に對社會對世間に對しても佛教は決してをろそかなるものではない。爾前經に於ても阿含小乘は殆んど全部世間的道德社會的活動の教義を以て充たされ、法華經に來りて完全に世法即佛法と開顯せられて居る。即ち「法師功德品」には「諸所說法隨」其義趣」皆與」實相」不」相違背」。若說」俗間經書治世語言資生業等」皆順」正法」」云々。宗祖宣はく「宮仕へを法華經と思召せ」」云々（四條金吾殿御返事）

論者は又「現代社會に對し何の働きかけの原理を持たない佛教者は、こゝに（政府當局のスローガンたる）自力更生を指導原理にして街頭に立つた」と云はれるが、それはアベコベで自力更生の本家本元はこちらにある、……たゝそれが緣因となつたかも知れないが。論者の「佛教は今餘りにも現代社會の情勢に對する指導精神を自らの上に缺乏せしめてゐる」との非難は、佛教の教義哲理の缺陷不足ではなくして、在來の佛教家の怠慢、布教家の責任にあることを吾々は懺悔するに吝かならざるものである。

次に論者は「佛教が元來宇宙的の解脫を目的とするものならば、鎭護國家は必ずしも佛教が宗教である爲めの固有要素であるといはれない。それは歷史的に觀察するならば、寧ろ一つの妥協的な妥である佛教は國家を否定することを必要としないが、國家よりも高次の宇宙的の態度に立つが故に、國家を超越し國家よりも更に根原的にならうとする。それこそは佛教に本質的の途である」云々と言つて居る。所論の如く實に佛教は宗教の本質としては超國家のものであるかも知れない、又眞宗の王法爲本や、眞言の鎭護國家や、乃至禪宗の興禪護國は、國家に對する妥協的な妥であるかも知れない。然し日蓮の所謂立正安國は決してそれ等の妥協的態度とは其の撰を異にする、所以は何ん、法華經そのものが日本國と不離の立場にある契合一致せる所の宗教であるからである。即ち日本國體の內容を說明せるものが法華經であり、法華經を裏書せるものが日本の國家であるのである。國家と即せざる、國家と對立してその優越權を爭ふ宗教が現代及將來の宗教として役立たざることは、智者を待たずして明かである。宗祖「立正安國論」に宣はく「夫れ國は法に依つて昌へ法は人に因つて貴し、國亡び家滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや、先國家を祈つて須く佛法を立つべし」」と。國家ありての佛法であり又國家は教法に依つて興隆する、即ち王佛冥合してそこに始めて佛教も活き國家も盛になるのである。然り而してそれはやがて一國家的國民的宗教として一國內に跼踏するものにあらずして、世界の壇場に一切の大衆に一大教訓を與ふる論者の所謂國際的宗教、世界的宗教なのである。即ち「三大秘法鈔」の「戒壇とは王法佛法に冥し佛法王法に合して、王臣一同に本門三大秘密の正法を持ちて、有德王覺德比丘の其の往昔を末法濁惡の未來に移さん時、勅宣並に御教書を申下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべき者か、時を待つべきのみ事の戒法と申すは是れなり、三國並に一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して蹈み給ふべき戒壇なり。」」となる。あゝ何と雄大

莊嚴なる大宣言ではないか。

げに現代及び將來の世界人類は此の王佛一如の眞宗教にのみ因つて始めて救はれる。統一本佛の光顯に依つてのみ眞宗教は成立し、永劫に人類を濟ふのである。他の妥協的宗教、イカサマ宗教がいくらあつても、又超國家だ超倫理だ社會的だ人類的だのと言つて騒いでみても、非常時國難を打開する指導精神とはなり得ない。

いまこゝに煩を厭はず獨り法華經と云はず佛教が如何に國家に重心を置いて居る（國土を擁護し國王を守護して居る）宗教なるかを、二三の經文によつて證明してみやう。

「仁王經」に曰く『爾の時に世尊波斯匿王等の諸の大國王に告げたまはく、諦かに聽け、我れ汝等の爲めに護國の法を說かん、一切の國土若し亂れんと欲する時は、諸の災難あり、賊來つて破壞す若し國亂れんと欲する時は鬼神先づ亂る、鬼神亂るゝが故に即ち萬人亂る、當に賊あり起つて百姓喪亡すべし、國王太子王子百官互に相是非し天地變怪あつて日月衆星時を失ひ度を失ふ、大火大水及び大風等是の諸の難起るべし、諸の國王等國を護り自身を護らんと欲するが爲には、亦應に是の如く此經を受持し讀誦し解說すべし』云々。

【註】如來の衆教を受持すれば佛天三寶の加護により、國土安穩なるべし、即ち佛法が興隆すれば國家は安泰に擁護せらるゝ事を說かれてある。

「同經」に曰く『我れ是經を以て國王に付囑し、比丘比丘尼優婆塞優婆夷に付せず、所以は何ん、王の威力無くんば建立すること能はず。』

【註】佛教は如何に尊くとも、宗教がこの人生に存在を保ち教化を全ふするには、暴力を以て教と國を破壞せんとするものに對し王の威力に由りて國家の安寧を維持しなければならない、これ王の威力を以て佛法を護持せよと說く所以である。

「守護國界主經」に曰く『爾の時に秘密主金剛手復佛に白して言さく、世尊よ佛の所說の如くんば諸佛常に平等三昧に住し、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如しと今は云何ぞ但だ國界の主を守護すと言ふや、諸の有ゆる貧窮孤惸困苦して依るなく歸するなく救ひ無く護り無きものを何ぞ愍念して守護したまはざるやと、爾の時に如來無上調御秘密主金剛手に告げて言はく、善男子よ諦かに聽け當に汝が爲に說くべし、諸佛如來は平等三昧に住せざるに非ず平等に由るが故に國王を守護す、善男子よ譬へば良醫の小さき嬰孩を見るに身疾病に禁り醫藥に勝へず、乃ち良藥を以て母をして之を服せしめ、母の服藥の力及び乳に由り、其の子乳を飲まば疾病皆除こるが如し。諸佛如來も亦復是の如し、一切を哀愍して國王を守護す。若し國王を護らば七を護るの勝益あり。乃至故に我れ偏へに國王を守護することを說く。』云々

【註】宗教は國家の外超然として廣く人類平等の上に立脚すべしと云ふ僻見を戒められたものである。

「心地觀經」に曰く『世間以法爲根本一切人民爲所以猶如世間諸舍宅柱爲根本而成立。王以正法化人民如大梵天王生萬物。王行非行無政理如琰魔王滅世間。』

【註】國家が正法に依るべき事を痛切に訓示されたものである前に引用した「三大秘法鈔」の「涅槃經」の有德王覺德比丘の話は實に國家存在の意義は正法護持にあることを示したもので、法國相國の眞精神を說いたものに外ならない。

「法華經壽量品」に曰く『衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、種種寶莊嚴、寶樹多花果、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆伎樂、雨曼陀羅華、散佛及大衆』

【註】本時の娑婆に還元せられたる、地上人間の國土は、佛力法力の感應に因つて理想の大平和境を現出すると云ふ、有名なる法華經本門本國土妙の法門である。

日蓮聖人は『觀心本尊鈔』に「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず、所化以て同體なり、此れ即ち己心三千具足三種の世間なり』と、吾等の世界に對する誤れる迷妄を打破して生きた世界觀を教へられてある。

× × ×

終りに世の諸の佛教家基督教者其の他新興宗教の人々よ、諸氏は虛心坦懷に暫く各其の我執を離れ、其の葛藤を止め以て眞の佛教の如何なるものなりや法華經純正日蓮主義のいかに權威ある宗教なりやを研鑽せられよ。佛教の心髓たる日蓮主義を無視して徒らに國土安穩世界平和を論ずるは恰も木に據つて魚を求めんとするの類のみ。大聖日蓮曰く『善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし』と

南無妙法蓮華經。

法華經講話

（第一講）

文學士　小林一郎

目次

まことの供養　身に行ふをしへ　經とは何か　大乘と小乘
自利と利他　經典を讀む心得　經典は一大文學
文底秘沈の深意　淺譯經典の價値　法華經淺譯の規模　後賢の經叢
『妙法蓮華經』と異譯

まことの供養

今回この統一會館に於て、法華經に就てのお話を致すことになりました。元來統一團は、故本多日生上人の教を受けられた諸君が發起されて、斯ういふ會館まで出來た譯であります。これは日生上人の御生前の廣大なる御恩に報ひやうといふお心持で出來たものと存じますが、私どもが、佛さまの御恩に報ひるとか、或は、小さく言へば自分の家の先祖とか親とかいふものに對して、感謝の心持をあらはすといふ場合には、所謂『供養』をするといふことになつて居ります。供養といふことは、普通の場合では或は花を供へるとか、食物を供へることが供養である、或は又大きく言へば、塔を建てる、五重の塔とか、三重の塔とか、大きな塔を建てゝ供養をするといふ事もあります。ところが供養といふことが、さういふ形に現れたとけで足りるかといふと、決して

足りるものではない。供養といふのは畢竟感謝の心持を表はすことである。それで『十地論』といふ書物の中には、供養を三つに分けて、たゝ品物を捧げるといふだけでは本當の供養の意味にはならないといふことが教へられてあります。即ち

利供養
敬供養
行供養

斯う三つに分けてある。利といふのは品物の事を言ふので、物を以て供養するのを利供養と言ふ。例へば花を供へるとか、食物を供へるとか、大きく言へば塔を建てるといふやうに、所謂有形のものを以て供養すること。それから敬供養といふのは、佛樣なり、或は先祖なりに對して禮を盡し、或はその生前の德を讃め稱へるといふやうに、有難いと思ふ心持を、自分の言葉なり行爲なりに現すといふことが敬供養である。それから行供養といふのは、佛樣の教を自分の身に實行する、或は近くなつた親や先祖の德に報ゆるやうな行をする、とにかく自分の行爲を以て供養することが行供養である。それで本當の供養は、この三つが揃はなければいかぬ。品物を供へることゝ、心から感謝して讃歎することゝ、自分の身の行ひを以て供養することゝ、この三つが揃つて始めて本當の供養と言へるのだといふことが教へられて居ります。普通に供養と言へば、たゝ花を立てゝ、お線香でも焚けばそれで宜いといふ風に思はれて居るけれども、それはたゝ形だけの話で、物を供へたら宜いといふものではない。

そこでこの三種の供養のあることは、誰でもチョット考へて見れば判りますが、この三つの供養の中に於て、假に重い輕いの區別を立てるならば、若し家が非常に貧しければ利供養は出來ない場合がある花を買ひたくても花が買へない、お燈明を上げたくても油が無いといふやうな場合があるでせう、これ

は已むを得ない。だからさういふ場合には利供養は廢めても仕方がない、これは一番輕いものである。それから敬供養、佛樣なり先祖なりを敬つて、その恩を稱へるといふことは貧しくてもなんでも出來るところが病氣か何かで動けないといふ場合には仕方がない、拜みたくても拜めない、立上ることも出來ないといふ場合には、これも已むを得ない。併ながら行供養、自分の行ひを以て佛の心持に適ふやうに或は近くなつた親の心持に適ふやうな行ひをするといふことは、どんな人間でも出來る事であつて、又これが一番根本の大事な事である。だから三つ揃へば結構だけれども、已むを得なければ利供養は缺いても宜い。又モット已むを得ない場合には敬供養を缺いても宜い。併ながら行供養がなければ一切の供養は意義を成さぬ。斯ういふやうに敎へられて居ります。

今私共が、本多日生上人の御生前の恩德に報ひやうと思ひ立つた時に、斯樣な建物の出來ることも結構である。又いろ〳〵お催しのあることも結構ですが、その根本の供養を考へなければいけない。それは吾々の日常の行ひに於て、本多上人が生前に敎へ下さつた事を少しなりとも實行して、さうしてその敎が世の中に役に立つやうに努めるといふことこれが一番大切な供養でなければならぬ。さういふ意味に於て、斯樣な會合を催して、お互に佛敎の信仰を養つて、小さく言へば自分の一身を修め、モット廣く言へば自分の爲すことが自ら世間に感化を及ぼして、今の世の中の生活を出來得る限り明るい、正しい、眞面目なものに變へて行かうといふことを考へなければならぬと思ひます。

身に行ふをしへ

私がこれから法華經に就てのお話を申上げることは、專らその目的の爲であります。私のお話は大

してお役に立たぬかも知れぬ、併ながら法華經は佛のお遺しになつた大事なお經でありますから、その經典の中に含まれて居る眞正なる意味をお互ひが能く味つて、さうしてこれを行ひの上に現して行きたい。斯ういふ事を先づお話を始める最初にお約束を致したいと思ひます。單に經典を講釋する、字義の說明をするといふことならば、態々斯ういふ所に集まるには及ばない。幾らもお經の講釋をした書物もありますから、さういふものを自分の家で炬燵にあたりながら讀めばそれで宜いのです。併しお互ひが斯樣に集まつて話をするとか、話を聽くといふことに依つて、心を一にして、尊い佛の敎を少しでも實行して行かう、世の中に弘めやう、斯ういふ心持を養ふ爲に、これを單なる說明の場所でなく、一つの道場であると考へて集まりたいものだと思ひます。たゞ書物の講釋をするとか、說明を聽くとかいふ考でなしに、佛の敎を自分のものとして、自分の行ひの上に現して行きたいといふ心持の人が集まるやうに致したいものだと思ひます。

實際佛敎が盛でさへあれば、佛敎といふものは單なる形式的のものである筈はありませぬ。けれども世の中が末になつて來ますと、動もすればそれが形式的になり易い。佛が滅くなられても佛の御精神が本當に世の中に弘まつて行く時代を正法の世と言ひますが、その正法の世に於ては、たゞ敎が說かれて居るのではいけない。

敎
行
證

の三つが揃はなければ正法の世とは言へない。敎といふのは「をしへ」で、この敎が敎へられ、又說明され、經典などが讀まれるといふこと、佛のお遺しになつた敎が學ばれ、傳へられるといふことが敎であります。併ながらその敎をたゞ理解しても、理解

したゞけでは本當に判らぬ、實は本を幾ら讀んでも讀んだゝけでは判るものではない、判るのは或る所までしか判らない。又人の說明を幾ら聽いても、說明を聽いたゞけで判るといふのは或る所までゝあつて、本當の事は判らぬ。その讀んだり、聽いたりした事が實行されなければならぬ。行といふのは實際にやつて見ることであります。やつて見ると判る。自分がやらないでどんなに本を澤山積上げて片端から讀んで見ても、文句は判るでせう、その中に含まれた意味を理解することだけは出來ませう、けれども『成程こゝだナ』といふことは、自分がやらない間は判らない。つまり佛敎が廢れて來たといふのはそれなのです。儀式は盛になつて來た、或は佛敎の學問は相當に盛である、けれども佛のお敎へになつた事を實際に實行しやうといふ覺悟の人が少なくなつた。さうすると佛敎といふものは廢れてしまふ。お寺がどれ程あつても、塔がどれ程あつても、それはたゞ一種の裝飾みたいになつてしまふ。行ひが伴はなければならぬ。そこでどうしても敎が行にならなければならぬ。恰度物の味ひのやうなもので、いくら說明しても味といふものは自分が味はなければ判るものではない。例へば『砂糖はどんなものだ』『甘いものだ』『甘いといふのはどんな事だ』『砂糖のやうな味だ』……といふ譯で、幾らやつても判らない。夏になると『アイスクリームが美味い』と言ふ『どう美味い』『甘くて冷たいから美味い』『甘くて冷たいといふのはどんなことだ』『例へばアイスクリームみたいなものだ』……同じ事を繰返すだけで少しも判らない。自分が實際にやつて見ると判る、甘いといふのは舌で舐めて見れば判る、冷たいといふのは口に含んで見れば判る。だからこの敎がどれ程尊いかといふことは、自分がその片端なりとも實行して見ると、始めて『成程こゝだナ』といふ所が判るのである。だから實行の伴はない敎といふものは敎

たる價値が無いものだ、實行しやうといふ決心が無くして、たゞ戯れに敎を說いたり、聽いたりするならば、それはつまらぬ事である。たゞ空論をして居るだけである。そこでどうしても敎と行とが揃はなければならぬ。敎と行と揃つて見ると、始めて證と言つて、成程こゝだといふことが判る。證は證悟といふことで『さとり』です。そこで敎といふ敎が傳へられて、それを實行した結果、佛の御精神はこゝだナ、お經に說かれて居るのはこれだナといふことが判つて行く。この敎と行と證の三つが揃つた所を正法の世、即ち佛の敎が行はれる時代であると言ふ

ところが世が末になると行と證は無くなつてしまつて、敎ばかり殘る。だから經は盛に讀まれ、又講釋する人は多くなつて來る。併し實行しない、實行しないから『さとり』もある譯がない、たゞ敎だけが滅びないで尙ほ殘つて居るといふ情けない狀態が續くのであります。併し今はそれではいけない、世の中が忙しいのであるから、態々暇を潰してたゞ敎を研究するといふやうな事だけやつても仕方がありませぬから、どうかお互に行を努め、又行の結果證を得るやうに勵んで參りたいものだと思ひます。若し實行しやうといふ決心が無いならば、たゞ佛敎は面白さうだから習はう、或は又佛敎の本を自分が永い間讀んで居つて、いろ〳〵の事を知つて居るから人の前で說明して見やう、そんな心持で話をしたり聽いたりするならば、さういふ話し方は一切『戯論』である。つまり實行の責任を負はないで言ふことを戯論と言ふ、たゞ面白さうな事を言ふ、又話が面白ければ『あの話は面白さうだ』と言つて喜んで居るといふやうに、身に行はうといふ決心が無くして話すことも、聽くことも、これは悉く冗談半分の事である。それは幾らやつても役に立たぬ。だから『涅槃經』の中には

戯論永く斷るを名けて涅槃と爲す。（戯論永斷名

爲涅槃）

とあつて、涅槃といふことはいろ〳〵な意味がありますが、玆には『さとり』といふ意味に說いてある『戯論永く斷ゆるを名けて涅槃と爲す』つまり無責任な議論をしたり、面白半分に聽いたりするやうなことがスッカリ無くなつてしまつて、說く人も實行するつもりで說き、聽く人も實行するつもりで聽くさういふ氣分が出來て、そこに本當の『さとり』といふものがあるのだと說かれて居ります。併し戯論でも、今のヂャズなどを聽くよりは良いでせう、けれどもどうかお互は戯論で止まらないやうに、一足飛に佛のさとりを得ることは出來なくても、だんだんにこれを身に行うて、凡夫の境界から佛の境界に近づかうといふ決心だけは初めにして置きたいものだと思ひます。

これはお話をするに就ての私の希望を申したのであります。私自身もなか〳〵口で言ふ通りには出來ませぬけれども、實行を努めまして、お互にこの敎を實行することに專ら力を注いで參りたいと思ひます。

經とは何か

法華經の本文に就てお話する前に、『經』とは一體どんなものかといふことを一通り申して置きたいと思ひます。普通にお經を讀むと言ひ、或はお寺にお經があると言ふ、その普通に言ふお經といふものゝ中には、經以外のものも含まれて居ります。佛の敎を世に傳へるに就て、その資料となるものが三種ある。それは何であるかと申しますと、

經
律
論

の三つである。『經』といふものも澤山ある、一つや二つではない、だからこれを『經藏』と言ふ。藏は

澤山といふ意味で、なにもお經を入れる『くら』といふことではない。經が澤山あるからこれを經藏と言ふ。『律』も澤山あるからこれを『律藏』と言ふ。『論』も澤山あるからこれを『論藏』と言ふ。この三つを併せて『三藏』と言ふ。そこでこの經・律・論に精通して居る坊さんのことを三藏法師と言ふ。所が後世になると、法師といふのを取つてしまつて、元奘三藏とか羅什三藏とか、人の名前のやうになつた。『三藏』といふのはこれはもと〳〵人の名前ではない、經と律と論とがそれ〴〵澤山あるからこれを三藏と言つた。後に三藏に精通した人のことを『三藏』と言ふやうになつた。だから三藏といふのはなか〳〵偉い名前です。

そこで經・律・論、いろ〳〵ある譯でありますがその經といふのはどういふものを言ふかといへば、佛のお說きになつた事を後世になつて書き傳へたもの、それが『經』であります。或は佛でなくても、他の人の言つた事でも、佛樣が、その言つた事は自分の精神に適つて居る、自分の言つたのと同樣に看做すと允されゝば、それはやはり經の中に入つて居る譯です。つまり佛のお說きになつた事、或は佛弟子であつても、佛のお說きになつた事に准ずべきもの、これが經であります。經といふ字は一體は『ひも』といふ字であります。文字の通り細い紐のことで、印度の言葉では修多羅と言ふ。何故そんな字を使つたかといふと、昔の印度では、女が髮の飾りをするのに、草花だの、木の花などを飾つたものです今のやうに造花がありませぬから、いろ〳〵な花を飾つた。印度へ行つて見ると草花にも實に綺麗なのがあります。蓮の花などのやうに大きな花でなくして、私共は名前を能く知りませぬけれども、いろいろな花があります。さういふ花を髮の飾りにする時に、これを細い紐で結んで、その結んだ花を髮に飾るのであります。その紐のことを經と言ふ、もと〳〵

花を紐で結んだものです。だから佛樣の仰しやつた事を一つに纏めて後世に傳へる。ちやうど紐で花を縛るやうに、佛のお說きになつた事を纏めて後世に傳へたものを、これを經と言ふ。つまり紐で縛つた花のやうなものだといふのでこれを經と申します。であるから何と言つても佛敎は經が根本です。佛樣が直接にお說きになつた事、或は他の者が佛樣の前で申上げて、佛樣がお前の言つた事は尤もだ、自分の考と同樣に看做して宜しいと允された事。さういふ事が纏めて傳へられたのが經でありますから、佛敎を學ぶ爲には經といふものが根本になることは謂ふまでもありませぬ。

所が佛敎といふものは理論ではない。前に申すやうにこれは實行しなければならぬものでありますから、その敎を學ぶ者は、日々の起居動作の上に一々その敎を現さなければならぬ。そこで『律』といふものが出來る、律といふのは規則で、日常の生活の

規則であります。これは非常に必要な事で、たゝ難かしい理窟を覺えたといけでは仕樣がないのですから、日々の行ひの上から自分を善くして行かなければならぬ。そこで日々の生活に就ての規律を立てる、それが律であります。朝起きる時には斯うやれ、顏を洗ふ時には斯ういふやうに洗へ、着物を着る時には斯ういふやうに着ろ、道を行く時には斯ういふやうに行儀良く歩け、人に會ふ時には斯ういふやうにしろといふやうに、日々の起居動作に就て、佛の弟子として恥しくないだけの事をやらなければなりませぬから、これをきめたものが律であります。だからそれは佛樣がお定めになることもありますし、中にはお弟子達同士が相談して申合せてさうして佛樣のお許しを得た事もある。律にはその兩方あります。斯樣に律といふものは、顏の洗ひ方から、着物の着方から定めるのでありますが、就中その律の中に於て大事なのは、惡い事をしないやう

に戒を立てるといふことが必要である。例へば嘘を吐いてはいかぬ、盜みをしてはいかぬ、人に對して失敬な事をしてはいかぬといふやうなことであります。だから律の中の一部分として『禁戒』といふものがある。斯ういふ事をしてはならぬと禁ずることです。盜むなかれ、詐るなかれ、夫婦でない男女の間の關係を結んではいけない、腹を立てゝはいけない、嫉んではいけない、喧嘩をしてはいけない……、いろ〳〵な事がある。さういふのは皆一種の禁戒でありますが、これは律の全體ではない、その一部分を成すものであります。律全體から言へば、顏の洗ひ方から着物の着方までがスッカリ入つて居る所謂佛弟子たる者の日常の規律でありますから、これは實に細かい事まで書いてある。例へば口を嗽ぐ方法まで書いてある。水を含んで三たびめぐらしてこれを吐けといふ、ブク〳〵と口の中で三度やつて吐けといふやうな事まで書いてある。そんな細かい

事はどつちでも宜いだらうと思ふけれども、その位まで細かく注意されてある。又その點をまるで捨てゝしまつてはいけないので、『俺は法華經を讀んで佛に成る道を知つて居るから』といふので、不行儀な無作法な、まるで日常の行ひが何をして居るかわからぬといふやうなことでは、これは決して佛弟子とは言へない。高い事も大事だけれども、手近な小さい所から慎んで行くことも大事なことでありますから、どうしても經と律とは並んで存しなければならぬものであります。

それから『論』といふのは、これは佛樣の仰しやつた事ではないので、後に出た人が經と律を說明したものであります。今では論といふと議論すると言つて、人と爭ひ合ふことを論と言ひますけれども、元來論といふ字は說き明かすといふ字であつて、爭ひ合ふことではない。經の深い意味を後世の人が說明をする、或は律の精神を說明をするといふやうに

経と律に對して加へられた説明、それが論であります。

この経と律と論の三つは、印度に於てあつたものです。それが又支那に傳はり、日本に傳はりして、支那の文章に譯されたり、中には日本の文章に譯されたりして居ります。吾々は印度の言葉は讀めませぬから、譯された文章で讀むのでありますが、兎に角佛教としては、経と律と論といふものは缺くべからざるものであります。

これは佛教ばかりではない。吾々が人に教へるのに、やはりこの三つがうまく揃はないと教へられないのです。小さい子供を教へるのでも、この三つがなくてはならない。『お前は斯ういふ事をしなければならぬよ』といふのは経です。それから『お前は斯ういふ事をしてはいけない』といふのは律に當る。『それは斯ういふ譯だ』と言つて説明するのが論に當る。経と律と論と揃はなければ、子供を教へることさへ本當に出來はしない譯です。たゝ理窟を言つたゞけではいけない。例へば『早起をしろ』といふのは経であります。『早く起きないと蒲團を剝いでしまふぞ』といふのは律であります。それは何故かといふと、『遲くまで寢て居ると體の爲に惡いからだ』と言ふ、これは論です。経と律と論と揃はなければ子供を一人教へることも出來ない、これを説明しないでたゞ律ばかりやつて居ると、『親父はどうも頭腦が舊い……』ナンといふことになる。律ばかりではいけない、どうしても経がなければならない、論もなくてはいけない。三つ揃ふと能く教へられる。さういふやうな譯でありますから、どうしても佛教としては経・律・論どれもやめる譯に行かないのであります。

それから佛教が支那に傳つて後に、支那の學者などが経・律・論の三つに就ていろ〳〵説明を加へたものがあります。又日本へ傳はつても日本の學者などが、経・律・論の三つのどれかに就いて説明を加へたものがあります。さういふものはやはり論と言つて宜い譯です。つまり説明といふ意味ですから、論と言つて宜いのでありますが、印度で出來たものを『論』と言ひますから、便宜上それと區別して、支那や日本の學者の書いた物を『釋』と言つて居ります。これはたゞ便宜上の話で、論と言つても差支へないけれども、印度で出來たものと、支那や日本の學者の書いたものと區別する爲に、釋といふ字を使つて居るのであります。

そこでこの経・律・論・釋の四つが全部含まれたものが、今日一切経とか大藏経とか言はれるものであります。大正時代になつてから高楠博士などの努力で出版されました『大正新修大藏経』といふものがありますが、経ばかりではない、この四つを皆含んだものであります。それで本當に佛教を研究しやうとすれば、その何れにも亘る方が宜いのでありますけれども、先以て経といふものが、佛様のお説きになつたことを直接に書いたものでありますから、根本としては経を讀み、又経を學べといふことになるのであります。そこで今お互にこれから法華経といふ一つの経を讀む、経だけが全部ではないけれども、その最も重要なものをお互が學んで行かう、さうしてその教を實行するやうに努めて行かうといふ譯であります。

大乘と小乘

ところでその経の中にいろ〳〵なものがあります極く簡單な経もあるし、非常に複雜な経もあります又その説かれて居る内容に就ても、極めて卑近な事を説いたものもあれば、非常に高尚な事を説いたものもある、これは實に千差萬別、一概に言ふ譯には行きませぬが、マア大ざつぱに別けますと、その中に『大乘』の経と『小乘』の経と、大小二種がある

譯です、細かに別ければ何十にも何百にも別けられるけれども、その根本の性質に就て別けるとこの二つになる。『乘』といふのはどういふ事かといへば、これは乘物といふ字で、船や車のことに譬へた、海や河を渡るのに、淺い所ならば泳いでも渡れるけれども、深い所、遠い所は泳いでは渡れないから、船に乘る、又道を往くのでも、近い所ならば歩いて行けるけれども、遠い所では歩けないから車に乘る。即ち船や車に乘つて私共は遠い所まで行ける。それと同じやうに、この人生のいろ〳〵の難かしい問題は、自分達のやうな凡夫の思慮分別ではいかない事が多いから、佛の教に縋つて、この人生の面倒な問題を乘切るだけの力を養はなければならぬ。ちやうど佛様の教といふものが船や車に當るのであります。船や車がなければ遠くに行かれないと同じやうに、佛の教に依らなければ、吾々はこの多事多難な人生を無事に通つて行くことは出來ませぬ。それで佛様の教を船や車に譬へて乘と言ふのです。

その『乘』の中に大と小と別けた。これはどういふ風に別けるかといふと、小さい方といふのは低い方で、各個人皆が自分の心の苦しみや惱みを除くことだけを目的にして學んで行く、その教を『小乘』と言ふ。人生は苦しい事が多い、思ふに委せない事が多い、どうしたらこの苦しみが無くなるか。どうしたらこの煩悶苦惱が無くなるかといふやうな、個人々々の苦しみ煩悶を除かうといふことを目的として學ぶ、さういふ要求に適した事が說かれてあるのが小乘の教であります。ところが人間といふものは一人で生きて居るものではない。夏になると何處でも埃の立たないやうに能く水を撒きます。水を撒くのに、自分の家の前だけ撒いたのでは何にもならない。自分の家の前だけ撒いたのでは、風が右の方から吹いて來ると、右隣りの家の前の埃が皆入つて來る。風が左から吹いて來ると、左隣りの家の前の埃が皆入つて來る。だから水を撒くといふには、どうしても自分の家の前だけ撒いたんでは役に立たない。お隣りにもお向ふにも奬めて一緒に撒かなければ、水を撒いた効果はありはしない。人生の事はその通りであつて、自分一人が煩悶を除き、苦惱を除いて平氣で居ても仕樣がない、世間は複雜である、世間のあらゆる人と接觸して居るから、自分以外の人をでも善くしてやらなければ、折角自分一人が修行をしても、その修行の効果といふものは現れない。まるで現れないことはありませぬが、その効果は極めて少ない。そこでどうしても吾々は自分を救ふだけではいかぬ、人を救はなければいけない。世の中は相持である。人間といふものは皆一緒に生きて居るもので、相持でありますから、自らを救ひ、人を救はなければならぬ。自分が覺るならば、他の人も覺らせなければならぬ、斯ういふことになる。

そこで『大乘』といつて、本當に自分を救ふと共に、人も救へるやうな修行をする、その教が與へられる、己れを救ひ、人を救ふ、己れを完うし、人を完うする、互に救ひ合ひ、互に教へ合ふ、さうして人生そのものが根本から、申分のない清らかな、立派なものになる。斯ういふ目的を以て說かれた教が必要になる。その教を大乘と言ふので、これが大きい方の教であります。だから小乘の方は一人で救はれやうといふ、大乘の方は多勢で一緒に救はれやうといふ。この頃の自動車などは、一人で乘る方が上等で、乘合自動車は安いのですが、教の方は乘合の方が上等なので、一人乘はいけない。成べく多勢で乘合ふのが良い、一緒に救はれなければいけない。又他の者も教の中に誘入れて、共に助かるやうにしやうといふことが必要なのであります。

自利と利他

さうして又私共も、自分一身の事だけ考へたの

では、一生懸命に修行しやうといふ氣分が起りにくいのであります。自分の事はどうでも宜い、面倒臭い。ところがこの自分が一人修行するといふことがたゞ自分一人でなしに、それがまはり中の人の幸福の本になるといふことが確かり捉へられると、どんな修行をするにも張合があつて、思切つてあらゆる困難に耐えることが出來る。だから『自利』といふこと、『利他』といふこと、或はこれは『自覺』『覺他』と言つても宜しい。自分を利するといふのは、何も金を儲けることではない。自分が本當に幸福になり、煩悶、苦惱を除いて行くといふことが自利です。利他といふのは他の人を利するので、他の人間を敎へ導いて、その苦しみや惱みの中から救つてやる。或は自覺と言つて自分で覺る、覺他は自分で覺るだけでなく、他の人をも覺らせて同じ道に入れてやらう。斯ういふ兩方面を併せ考へなければならぬ自分が少しわかれば、これを人に分けてやらうといふ氣持になる。それから人に敎へてやらうといふ親切な心持があると、人を敎へる爲には自分がポンクラではいけないから、自分もモット修行しやうといふことになる。であるからこれはお互に救ひ合ひ、お互に補ひ合ふ。自分が善くならうと思ふと、人を善くしやうといふことになり、人を善くしやうと思へば、自分がモット善くならうといふ、自分がモット善くなれば、又人をモット善くしやうといふ風に、相持になつて、だん〳〵纏上つて行く、さうして共々に向上するのであります。『人はどうでも俺さへ良ければ……』さういふことではいけない。又自分がポンクラで『人を救ふ……』そんな事が出來るものではない。それはまるで料簡違ひの話であります。『自分はちつともわからぬけれども、何とか他の者を善くしてやらう……』さういふやうな人もあるけれども、それはいけない。子供が往來で喧嘩をして居るのを止めて『友達と喧嘩などしてはいけな

い、おとなしくしろ』と言ひながら『なんだつて始終喧嘩をするのだ、この馬鹿野郎……』それでは何にもならない。親父が子供に馬鹿野郎と言ひながら、子供の癖の惡いのを矯めやうと言つてもそれは出來ない。自分がやらない事を人に奬められるものではない。小僧がどうもぐづ〳〵して居る、『なんだこの雜巾掛は、モット確かりやれ……』と言ひながら、自分は炬燵に入つて居る。それでは小僧は言ふことを聽かない。どうしたつて人に勸めやうと思へば、自分もやらなければならぬ。又自分が幾らかわかつたら、これを人に及ぼさうといふ心持がなければならぬ。自利と利他、自覺と覺他、これが揃つて行かなければ本當の事は出來るものではない。さういふやうな道を敎へられたものが大乘の敎であります。

それですから吾々は大乘の敎を學ぶことを心掛けたいと思ひます。無論小乘の敎でも價値が無いことはありませぬけれども、今日のやうに殊更複雜な時代になりますと、自分一人を善くしやうと言つてもそれは出來ない事ナンでありますから、大乘の敎を學ぶといふ心持をお互が有ちたいものであります。そこでその大乘の敎の中に於て、殊に優れた根本的の大事な問題を說かれたものが『法華經』であります。法華經に就ては後にモット詳しく申しますが、私共は法華經をお互に學んで行かう、法華經を學ぶといふことは、要するに自分を利すると共に人を利する、自分で覺りを開くと共に他の人を覺らせる。さうして大きく言へば人類全體を善くするのでありますけれども、イキナリ人類全體の爲といふ譯には行きませぬから、自分を中心として、自分の周圍の人をだん〳〵に明るい、正しい、眞直な心持の人にして行かう、斯ういふ心持でこれからこの經典に就ての研究をお互にしやうといふ譯であります。

以上で先づ經といふことゝその經の中に大乘小

乘のあることを一通り説明しました。その大乘の經典の中に於て、法華經がどういふ特別な性質を有つて居るかといふことは後に申します。その事を此處で申して居ると大變長くなりますから、今此處では大乘の經典の中に於て特に重要な問題を取扱つたものだといふだけに止めて、法華經そのものゝ説明は後廻と致します。

經典を讀む心得

次に經典といふものを讀むに就て注意しなければならぬ事柄を少し申して置きます。これは私なども自分で經驗のあることでありますから、どなたも御同樣であらうと思ひますが、恐らくは不用意にして經典を讀んで失望しない人は誰も無い、現に私などもその一人でありました。初めて法華經を讀んだ時にはガッカリしてしまつた。法華經といふものは佛教の奥義を説いたもので、これを一度讀めばスッカリ覺ることが出來るナンと思つて法華經を讀んだ、ところが覺るドコロではない、ガッカリしてしまつた、なんだか變な事ばかり書いてある。地面の中から塔が湧いて出たとか、空から人が降つて來たといふやうな事が書いてある。さうして困つたことにはこの法華經を信ずる人は偉い人だとか、法華經を信ずる効果は斯うだとかといふやうな事ばかり書いてある。謂はゞ法華經の効能書みたいに思はれる、これが法華經ではなくて、この外にこんなに効能書を列べた法華經といふものが別にあるのではないかといふ風な感じがするのであります。私などもさういふ感じがしました。私の友達なども皆さう言つて居る。『君が法華經が良いと言ふから讀んで見たけれども、なんだか法華經の効能ばかり書いてある。何か別に本物があるのぢやないか』といふやうな事を能く言ふのであります。これはマア多くの人がウッカリ讀むとそんな感じがするらしい。

それから又お經を讀んで見てもちつとも有難くないと言ふ人があります。これは實は尤もな事です。論語などを讀むと有難い、論語はモウ一番初めから『學んで時に之を習ふ』といふやうな、學問の仕方を説いてあるから、一行讀んだら有難い。『人知らずして慍らず』といふやうなことも有難い。論語を一枚讀むと、兎に角人間は斯ういふ心掛をしたら宜からうナと思ふ。それから聖書でも、舊約全書の方は違ひますが、新約全書の初めの所を讀むと有難い、耶蘇が吾々の心掛を説いて居る。新約全書の初めの福音書を一頁も讀むと、人間は斯ういふ心持で居れば宜いといふことが説いてある、有難い。ところが法華經を初め一枚讀んで見てもちつとも有難くないお釋迦樣が靈鷲山に居た時に、其處に集まつた人が誰と誰と誰……人別書みたいな名前だけが澤山列んで居る。ちつとも有難くない、論語のやうに行かない。それから初めの所はいけないかなと思つて、少し先の方を繰つて見ると、舊い家があつて、其處にいろ〳〵な鳥が居て、獸が居て、蜈蚣が居て、蜘蛛が居て、蛇が居て……そんな事ばかり書いてある。ちつとも有難くない。『一體法華經は何が書いてあるのか』斯う思つてガッカリしてしまふ。これは初めて經典を讀む時には誰にも起り易い一つの疑惑であります。この事を最初に一つお斷りして置かなければなりませぬ。

經典の性質

それは何故かと申しますと、法華經といふものは論語とか聖書とかいふやうなものとは性質が違ふのであります。論語といふものは恐く孔子の弟子の又弟子が編纂したらしい。これは孔子といふ人が日常言つたりしたりした事を聞き傳へて、それを書いた謂はゞ孔子の言行錄であります。孔子が或る時斯う言つた、或る時斯ういふ事をしたといふやうに、聖

人たる孔子の言つた言葉、或は聖人たる孔子の實行した事をポツリ〳〵と蒐めたものでありますから、一行讀めば一行だけ價値が有る、一枚讀めば一枚だけ價値がある。それは不思議はない。又聖書にもいろ〳〵ありますけれども、新約全書の初めの福音書といふものは、やはり耶蘇の弟子の又弟子あたりが耶蘇の言つた事を聞き傳へて、それをポツリ〳〵書いた。ちやうど論語と同じやうなものです。耶蘇が或る時斯う言つた。耶蘇が或る時斯ういふ事をしたといふ、耶蘇の言行錄であります。だからそれは耶蘇のやうな偉い人の言つた事でありますから、一行讀んでも、一枚讀んでも相當な價値がある。又有難くもある、ところが佛敎の經典といふものはさういふものではない、佛敎の經典はお釋迦樣の言行錄ではありませぬ。これは能く考へなければいけない。

佛敎の經典といふものはどういふ風にして出來たかといふと、お釋迦樣が敎をお說きになる時に、御自分でお書きになつたことの無いのは勿論、お弟子だつてそれを書いたものはありはしない。又初めて尊い敎を聽いて、その時に書けるものではない。今吾々はいろ〳〵の本などで慣れて居りますから、どんな尊い敎でも幾らか平易な心持で聽けるけれども未だ曾つてそんな事を聽いた事のない人間が、いきなりお釋迦樣のやうな偉い方の敎を耳から聽いた時に、それを書留める餘裕などのあるものではない、モウ心にしみ渡つて、身動きもせずに聽いて居つたに相違ない。又それだけの力がなければ佛の敎とは言へない。筆記する餘裕などがあるものではない。それはモウ心の奧の奧までしみ渡るのでありますから、脇目も振らないで、手に汗を握つて聽いて居つたに違ひない。その間に敎といふものが本當にその人の心に入るので、迚も書留める遑などあるものではない。お釋迦樣は御自分では書かれない、聽いて居る者もたゞ聽いて居つた。そこで聽いて居つた者

が、あまりに有難いから、『これを自分一人で聽いては勿體ない』といふので、その人が他の人に話傳へる、話傳へられた人が聽いて、『成程これは有難い』といふので、又他の人に話傳へる。斯ういふ譯で、お釋迦樣が例へば一時間敎をお說きになれば、その說いた事が樣々の人に依つて傳へられ、傳へられして、これが世の中に擴がつて行く、又それを後で傳へ聞いた人が、『これは忘れてしまふのは勿體ない』と言つて書留めて置いたといふ事もありませう。けれどもそれは餘程後で書いたもので、直接敎を伺ひながら書いたといふやうなものではない。それから又印度では昔から、佛敎の起らない前から、一種の音樂的の天才も澤山ありましたので、佛敎以前からいろ〳〵な敎が歌に歌はれた例が澤山あります。恐らくお釋迦樣のお說きになりました事も、それが廣く世に流布する間に歌ひ傳へられたといふ事もありませう。さういふ風になつて傳はつて參つたものであります。ですからお釋迦樣が靈鷲山といふ所で八年敎をお說きになつた。それが語り傳へられ、歌ひ傳へられ、又書き傳へられた、書き傳へると言つても、本當にその言葉の通りに書いたものではありませぬが、心覺えに書き傳へられた。さういふ風に語り傳へられた材料、歌ひ傳へられた材料、書き傳へられた材料といふ、三種の材料が世の中に流布して居りました。それがズット後になつてから、特別の天才的の人に依つて纏められて、これが一つの纏つたものになつた。それがお經といふものです。

經典は一大文學

ですからお經といふものはこれは非常な天才が纏上げたものです。その名前の傳はらないのは殘念でありますけれども、論語を作るとか、聖書を作るといふやうなことゝは違ふのであつて、お釋迦樣が八年間、靈鷲山なら靈鷲山で說かれた事が、樣々の材

料となつて傳はつて居る。その樣々の材料を蒐めてさうしてこれを文學的の立派な一つの作物として作り上げたものが經であります。ですから經といふものは立派な文學です。たゞの言行錄ではない、一つの立派な文學である。少し非倫な譬へではありますが、ちやうど英吉利にミルトンといふ大詩人があつて、神樣に就ての言傳へを材料として『失樂園』(Paradise Lost)といふものを書いた。伊太利にダンテといふ大詩人があつて、さうして神に就ての言傳へを本にして神曲(Divine Comedy)といふものを書いた。それと同じやうなものであります。經典は一つの敎であるが、同時に最も優れた文學である、ミルトンやダンテの詩に匹敵すべき大文學であります。それだから經典を讀むのには、たゞの言行錄を讀むやうな氣持で、一行々々讀んで一行々々これを味はつて行かうといふやうな簡單な考ではいけない、全體を讀んで、全體の中に含まれた深き意味を捉へやうといふ用意がなければ、經を讀むことは出來ない。それを初めにお斷りを申上げて置きたい。論語などゝは違ふのであります。論語は一枚讀めば一枚だけで宜い。法華經は一枚だけではいけない、全體の組織といふものが出來て居る。だからそれを一部分だけ讀んで『これで解つた』といふ譯にはいかないのであります、

これを譬へて申しますと、論語のやうなものは、よく茂つた植木が澤山列んで植つて居るやうなものですから、一本づゝ見て宜しい。松の樹、櫻の樹、檜の樹、梅の樹といふやうに、一本づゝ見て宜い。全體として見てもよいが、一本づゝ見ても美しい。櫻の樹などは一本あつてもなか〳〵花は綺麗です。ところが佛敎の經典は、その樹を材木にして、それを組立てゝ一つの家が出來たやうなものですから、この家を知るには、家全體を見なければ、柱を一本だけ見ても家といふものは解らない。お經の一部分

を拔いて見て、それで佛敎を知らうとするのは、チョウド家の中の柱を一本だけ見て、それで其の家を知らうとするのと同じであります、それは無理です一つの組織の出來て居るものでありますから、その一部分だけを見て全體を知らうといふことは無理な話であります。その柱も床柱かなにかを見て判斷するなら宜いけれども、物置の柱などを捉へて『どうも彼處の家は粗末だ』などゝ言はれたのでは困る。黑板塀だけ見て『どうも彼處の家は眞黑だ』と言はれては困る。それは塀が黑いのであつて、家が皆黑いのではない。家といふものは玄關もあれば、床の間もあれば、二階もあれば、いろ〳〵の所があるのですから、その全體を見て、初めて『アゝこれは斯ういふ家だナ』といふことがわかる。それですから經典を讀むのに、所々飛ばして讀むといふ讀み方は良い讀み方ではない、忙しい時には仕方がありませぬけれども、法華經を所々飛ばして讀んで見て『これで法華經がわかつた……』そんな譯には行かない それは成程有難い事はあつちにもこつちにもあるけれども、その一部分を有難いと思つてそれで終つて居るならば、それはちやうど立派な家の全體を見ないで、床柱一本だけ見て喜んで居る、天井板だけを見て喜んで居るやうなものであります。檜か杉の天井を見て「どうも良い天井だ」と言つて、その天井だけで家が皆わかつたと思ふ人は慌て者であります。

經典はさういふものでありますから、經典の全體を能く讀んで見て、その經典に含まれた深き意味を酌取るといふだけの用意がないと、經典を折角讀んでも何にもならない。時とすると重複したやうな所もあります。こゝの所は飛ばしても宜いだらうといふやうな所もあります。けれども、能く讀んで見ると重複するのは重複すべき必要があつて重複して居る繰返すのは繰返すべき必要があつて繰返してあるの

であつて、經典の一字一句たりとも無駄なものはありはしない。それでこれから法華經を讀んで參りますと、同じやうな事が澤山出て來ます、こんな所は拔かしても宜ささうなものだと皆樣もお思ひになるかも知れませぬけれども、それはいけないのです。さういふやり方では、本當の經典の全體を味はふといふことは出來ない。一字でも一句でも拔かしてはいけない。それが皆必要な言葉である。ちやうど柱一本無くなつても家は困る、床板一枚剝れても家は不滿足なものになると同じやうに、法華經といふものは、ちやうど立派な建築物のやうなものでありますから、ちと手間が取れて面倒でも、一つ〳〵拔かさないでスッカリ讀んで見て、その中に含まれた尊い意味を酌取る。これだけの用意がなければなりませぬ。それでありますから私はこれからお話をするのに拔かさないで端から皆讀んで參るつもりでありますが、その代り相當な手間が取れませうけれども、それは已むを得ない、「どうもあんな事を繰返し〳〵言つて居る、面倒臭い、早くやつてしまへば宜い」と思はれるやうな方は、初めからお出でにならぬ方が宜い。人間の一生涯の大事を決定することですから、そんなに氣が短くてはいけませぬ。一字一句を端からスッカリ讀上げて、さうしてその中に含まれた深い意味を酌取つて行くやうにしなければなりませぬ。これはマア經典を讀むに就いて、一通りの用意として初めに申上げて置くのであります。

文底秘沈の深意

併ながら何と言つても言葉は言葉、文字は文字であります。言葉や文字で盡されない深い意味の有ることを知らなければなりませぬ。人間の言葉といふものは限りが有るものでありますから、限り無き深い意味といふものは、どんな雄辯家でも言ひ盡せるものではない、どんな名文で書いたつて、文章や文字で盡せるものではない。だから文字は道具であつて、これを通して、その文字の底に有る、文字に言ひ表はされない深い意味を、確かりと捉へなければいけない。それは各自の努力に依るのであります。又私のやうな者が幾ら說明しても、說明は多寡が知れて居ります。この說明だけで本當の深い意味がわからう譯もない、これはもうホンの道具であります。支那の天台大師といふ人が法華經を弘めました法華經が今日の如く世に弘まるに就ては、天台大師の努力が非常に大きいのでありますが、天台大師はこの法華經の壽量品といふ所を讀んで、その壽量品の言葉に表はれて居ない深い意味を覺つた。さうして天台一家の說を立てました。それを天台は「文底秘沈」と言つて居ります。文章の底に秘して沈めてある。言葉に表はれない深い意味がある。秘して居るといつても無理に秘したのではない。言葉や文字では何と言つても表はせない、言葉は言葉、文字は文字、多寡が知れたものです。その文の底に秘して沈まつて居るもの、何といつても言へないもの、それはその言ひ表はした言葉、言ひ表はした文字をたよつて、各自が捉へなければいけないのです。一通り表面だけを見てもさう有難いことはない、それはモウ各自の工夫に俟つより仕方がありませぬ。私も出來るだけ文字に執はれないで、內の意味までも說明するつもりではありますけれども、併し人間の言葉でさう言ひ盡せるものではありませぬから、そこは御銘々に研究をして下さつて、能くお考へ下さつて、さうして文章の底に秘れて居る、文章に如何に表はさうとしても表はすことの出來ないものを捉へるといふことに、お心掛けを願ひたいと思ひます。經典といふものは前に申すやうに、佛樣のお說きになつた事が本になつて出來て居るので、その佛が敎をお說きになつたのは、學者が學說を說くやうな態度ではないのでありまして、心の全體を打込んで說

かれたものであります。ですからその經典を通して佛のお心持と吾々の心持とが通ひ合ふといふ所まで行かなければ、本當に經典を讀んだといふことにはならない。マア容易にさういふ境涯になることは難かしいでありませうけれども、併しお互が努めれば出來ない譯はありませぬ。どうぞさういふやうなつもりで經典に對するやうにありたいと思ひます。

漢譯經典の價値

次に一體吾々はどういふ言葉で書かれた經典を讀むのかと言ひますと、漢文で書いたものを讀むのであります。或は和譯したとは言ひましても、漢文を假名混りに書き下したものであつて、要するに漢文であります。これは一體どうだらうか、なにも印度の昔に漢文があつた譯ではない。印度では印度の言葉で書いたものであります。それを漢文に譯した。「譯したものを讀んだのでは本當の事はわからないのではないか」斯ういふやうな疑ひも起るのであります。又さういふ議論をして居る學者もあります。

私共の知つて居る學者にもあります。印度の言葉の梵語と、支那の言葉の漢語とはまるで言葉の性質が違ふ、だから梵語を支那の文章に寫したつて本當に寫せるものではない。佛教を學ばうと思ふならばどうしても梵語を習つて原本を讀まなければ本當ではない、「お前達の讀んで居る漢文のお經は、佛教の形だけを寫したもので、それは佛教を學ばうとするならば本當ではない」斯ういふ事を言ふ學者が隨分あります。若しさう言はれゝば私共は默つて居るより仕方がない、私共は梵語を知らない。知らない者に幾ら梵語の講釋をされても、善いとも惡いとも言へない、贊成も出來なければ反對も出來ない。「さうですか」と言ふより仕方がありませぬ。

所が私共が歴史的にいろ〳〵な事實を見ると、決して梵語を知らないで、漢文ばかりに依つて佛教

を修行して居た幾多の偉大な人、佛樣の御眼から御覽になつても申分のないやうな行ひをして居る人を幾らも見出すのであります。若し梵語がわからなければ、佛教がわからぬといふならば、漢譯の經典に依つてそれ程の大きな力が與へられるといふことは不思議である。自分が梵語が出來ないからと言つて自分の田に水を引く譯ではありませぬが、どんな立派な人でも、例へば今日は二月の十六日でありますが、この日に降誕なさつた日蓮聖人でも、決して梵語を知つて在らつしやつた譯ではない。漢譯の法華經を讀まれたのでありますが、漢譯の法華經に依つてあゝいふ偉大なる事をして居られる。その他幾他の德の高い人、行ひの尊い人、皆漢譯の經典に依つて修行した人である。吾々の知つて居る限りに於てもさういふ人が多い。さうして見ると、漢譯のお經といふものは、決して或る論者の言ふやうに、佛教の本當の精神を傳へ損つたものだといふことは言へないと思ふ、もと〳〵言葉といふものは道具なのでありますから、言葉を通して佛の心持と吾々の心持と通ひ合ふ時には、吾々は佛に近づいて行ける。その佛の心持と通ひ合ふ爲には漢譯の經典でも事足るものだと私は信じて居ります。それは今申すやうに幾らも偉大な人が漢譯の經典だけに依つて修行した、その事績を見て私共は安心することが出來るのであります。

法華經漢譯の規模

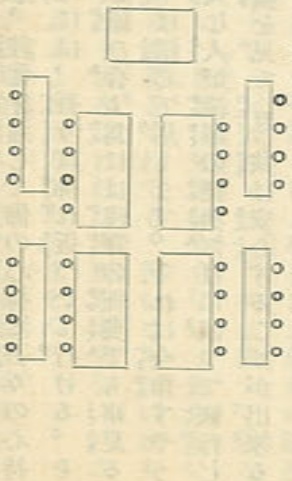
それから又漢譯經典なるものは、決して梵語の經典を直譯したものではない。そこを一つ考へて見なければなりませぬ。直譯したものならば、支那の言葉と印度の言葉と違ふから、印度の言葉の五つで表はされて居るものを、支那の言葉の五つで表はしてもうまく行かないでせう。直譯といふことは本當は出來るものではない。國の言葉が違へば、他の國の

言葉をその儘譯するといふことは本當は出來ない筈です。私共が日本の文學を西洋の言葉に譯して見ても、直譯をしては少しも面白くない。例へば

古池や蛙とびこむ水の音

といふ有名な俳句があります、これを若し英語に譯して、「其處に古い池がある、その池に蛙の飛込んだ音がポチャンと言つた」といふやうなことを書いたつて、それは句にも詩にもなにもなりはしない。ですから直譯では、本當の原文の趣きは傳はらないと言つて宜しいでせう。私は梵語を知りませぬけれども、梵語に何とあるのを支那の言葉に一つ〳〵直譯したならば、それは原文の趣きは傳はらないでせうけれども漢譯の經典の出來たのはさういふものではない、言葉を言葉で譯したのではない。梵語に書かれた深い意味を酌取つて、その意味を間違へないやうに漢文に書いたものである。字を字で譯したのではない。その本當の意味がわかつて、その意味を漢文で表はしたものである。だからこれに依つてその原本の精神を酌取るといふことが出來る譯であります。

例へば支那に於て經典が譯された時の樣子を考へて見ると、今これからお互に法華經を讀むのでありますが、法華經といふものはどんなにして譯されたか、これは後にもう少し詳しく申します羅什といふ人が譯したとなつて居ります。所が、羅什といふ人が自分で筆を執つて書いたものではない。いろ〳〵の記錄に依つて考へますと（圖を示す）



斯ういふ工合に机があつて、此處に羅什が立つて居

る。さうして自分が書くのではない。羅什は梵語の法華經の文を持つて來て、これを說明する。さうすると此處に澤山の人がそれを聽いて居る。これは皆信仰もあり、學問もあり、十分な力の有る人が、この羅什の話すのを聽いてこれを筆記する、その人の數は數十人、或は數百人、法華經などでは、これを書く爲に集まつた人が延人員で八百人に達したといふことであります。夥しい人の數でありますが、それは孰れも信仰のある又學問のある人がこれを聽いて、さうして銘々がこれを支那の文章に譯しましたものを持寄つて、それを討議するのであります。皆が草稿を出して、「この間の話の一つの言葉は私は斯ういふやうに書いたがどうだ」又片方の人が「私は斯う書いて見たがどうでせう」と言つて、互に持寄つて。さうしてそれに就て討議をする。その討議をする時には、横の方に傍聽人が居る。書いた人は皆此處に集まつて討議をするのでありますが、傍聽人が居つて、その傍聽人は、力の有る者は發言權を有つて居る、「失禮ですがそれは斯うしたら宜からう」といふやうなことを言ふ。それから力の無い者は發言權を有たないで默つて聽いて居る。さういふ風にしてスッカリ仕上げたものであります。だから法華經一つがスッカリ漢譯が出來るまでには、直接筆を執つた者の數が約そ八百人、傍聽人の數まで入れると延人員にして二千人を超えたと謂はれて居ります。これだけの人が集まつて、さうしてたゝ面白半分にやつたのではない、本當に信仰があつて、本當に佛教を支那に傳へやうといふ熱心のある人が集まつて羅什といふ人の口から言つた事を熱心に聽いて、熱心に解釋して、その意味を能く呑込んで、それを漢文に寫した。その一字一句を更に討議に討議を重ねて、皆が成程といふ所で定めたものであります。であるからこれはモウ確に原のお經の意味を正しく寫し得たものと信じて宜からうと思ひます。私は梵語

が出來ないからそれだけしか言へませぬけれども、さう信じて宜い譯であります。鳩譯といつても、今の吾々がやるやうに、一頁幾らといふ報酬で、萬年筆を走らせて、目をこすりながら夜半までやつて居るといふやうなのとは違ふ。本當に命懸けで、延人員にして二千人にも達する人が精神を籠めてやつた、その結晶であります。でありますから私は梵語が讀めない癖に生意氣を言ふやうですが、これ程にして出來た漢譯の法華經を信じて宜いと思ふ。前に申したやうに、漢譯に依つて修行して幾多の偉大な人が出たといふことも一つでありますけれども、又漢譯の出來たその時の事情から考へても、私はこれを信じて宜いものだと思ふ。安心してこの漢譯の法華經を讀んで、私共は修行して宜いものだと思ふのであります。「それでもいけない、お前が何と言つても漢譯は當にならぬ」と言はれるならば、それはモウ梵語をお習ひなさるより仕樣がないのですから、

これは私の責任ではないことになつてしまふ。

後賢の絶讃

殊にこの羅什の譯した經典といふものは、後世の人が讀んで見まして實にこれは名譯だと言つて居るのであります。唐の世に至りまして、道宣といふなか〳〵の學者で偉い坊さんがありますが、この人が羅什の漢文に譯した法華經を批評して斯う言つて居ります。

其の譯する所、悟達を以て先と爲す。佛道寄の意を得たり。（其所譯以悟達爲先。得佛道寄之意）

「其の譯する所」――羅什の譯した法華經といふものは、たゞ文字を譯したのではない。「悟達を以て先と爲す」――その意味を悟つてさうして達する、その心持を確かり捉へるといふことを以て、一番大事な事柄として、譯して居る。だからその譯したお經

は「佛、道寄の意を得たり」――佛樣が後の世に道してお傳へ下されたその御精神に能く合したものである。斯ういふ事を、道宣といふ非常な學者が申して批評して居ります。その他このお經に就ての批評は澤山ありますけれども、これは一例を申しました古來さういふ風に言はれて居るものでありますから私共はこれを信ずるのであります。これ程に努力したもので、又後世の人もこれ程に讃め稱へて感服して居る譯でありますから、これに依つて修行をして宜からうと信じて居る譯であります。

「妙法蓮華經」と異譯

それから法華經といふ經典に就て、吾々は羅什の譯した法華經を讀むのでありますが、その他に譯されたお經はなからうかといふ問題が起りますが、これはあり得る譯でせう。何故ならば、お釋迦樣が御自分でお書きになつたなら一種しかない筈でありま

す。又お釋迦樣の眼の前で誰かお弟子が筆記をしたなら一種しかない筈ですが、前に申したやうに語り傳へられ、書き傳へられ、歌ひ傳へられたものが材料になつて出來たとすると、靈鷲山で八年間お說きになつた事をいろ〳〵に傳へ、いろ〳〵に纏め上げたといふことが想像されるのであります。甚だ惡い例ではありますけれども、上野の公園で或る大會があつたといふやうな時に、新聞に書かれる。その記事は、新聞記者が皆銘々に書きますから、いろ〳〵違つた書き方をする。マアそれと同じやうに、お釋迦樣の敎を傳へるのに、いろ〳〵に語り傳へ、又それを材料としていろ〳〵に纏上げたものであらうといふことは想像が出來る。恐らくは釋尊が靈鷲山に於て八年お說きになつた事を、經典に仕上げたものが何十種もあつたでせう。その夥しくある中で、自然淘汰されて、つまらないものは自から世に行はれなくなつて、誰が讀んでも感服するやうなものが後に殘つたに相違ない。だから同じ靈鷲山で說かれた法華經でも、今吾々の讀む法華經と同じ性質のもの

が、印度には澤山あつたと考へられる。それが支那に傳はつて、支那の言葉に譯されたものだけでも六種ありました。これは譯し方が違ふのでなくて、原本が六種あつたといふことであります。その六種が漢譯されましたが、その中の三つは亡びて今はありませぬ。支那は昔から革命があつたり、内亂があつたりしましたから、その中の三つは亡びて世の中に傳はりませぬ。今では漢譯された法華經としては三種傳はつて居ります。その中でお互がこれから讀まうとする「妙法蓮華經」といふのが最も完全なもので、殊に優れたものである。これは總ての學者の說の一致する所であります。誰が何と言つたといふやうな詳しい事もありますけれども、それは今の話の目的でありませぬから略しますが、兎に角六種の漢譯の中の三種が殘つて、その中で一番優れた妙法蓮華經といふのをこれから御一緒に讀まうといふ譯であります。

この妙法蓮華經の漢譯といふのは、餘程後で出來たものであります。佛教が支那に初めて傳はりましたのは後漢の明帝の時でありますが、西洋紀元にして六十七年であります。(斯ういふ所に耶蘇紀元を使ふのは變でありますけれども、いろ〳〵年號の變化などがあつて簡單にわからないので、據ろなく耶蘇紀元を用ひます)さうして今お互が讀まうとする妙法蓮華經が、羅什に依つて完全に譯されたのが西洋紀元で四百五年であります。ですから佛教が支那に入つてから三百何年經つて、初めて法華經の漢譯が出來た譯であります。それは初めの間は研究する人も少いでせうし、信仰する人も少いでせう。三百年以上も經つて、佛教が世の中に流布して、佛教に就ての知識を有つて居る人、佛教の經典に就て批評する眼識を有つて居る人も多くなつた時代に、前にお話したやうな完全なやり方で譯されたのであります から、その譯本の「妙法蓮華經」といふものが殊に價値の有るものであり。又殊に大切にされたものだといふこともわかる譯であります。それにしてもこの法華經といふものは、今から千五百年餘り前に譯されたものであります。

先づ今日は前置として、法華經そのものに就て大體申上げて置きます。(第一講了)

記事

教化團體聯合會　教化事業御奬勵の御下賜金配賜をうけた東京府教化團體聯合會では、十二月九日午前十一時　東京府廳正廳に於て「御下賜金拜戴式」を擧行して、吾等加盟團體代表者約五十名、本團よりは礒部理事、府聯合會からは會長香坂知事、理事中村學務部長等、中央聯合會から松井常務理事、古谷幹事等列席型の如く擧式、終つて參會者一同は午餐を共にし午後一時から懇談會に移つて教化運動の實際問題を練つた。

日蓮宗管長更迭　十二月十五日午前十一時より同宗務院樓上に於て新管長神保日慈大僧正の就任式が盛大に擧行された當時神保新管長の御寶前奉告文の要旨は

宗門の現狀が遂に非才不德の自分を已むなく起たしめられた、一度起つと決した以上は斷じて黨同異伐、醜陋なる鬪諍を斥け、この天下非常時に際して必ずや異體同心に布教興學の實を擧げ立正安國、法國冥合の成果に邁進し以て祖恩に報謝し君國に奉仕せん。

との大決誓が述べられてあつた、風間前管長は病軀を故山に養はんとせられてゐる。菩薩は法の爲めの故に五體を長養すべきであらう。

此日の來賓には門下外、豐山派管長や淺草寺貫主等の顏も見へたが、顯本系に於ては獨り本團礒部理事のみ、佛徒はこの非常時に宜しく互に相提携すべきである、何に況んや門下に於ておやである。

幾多の祝辭祝電もあつたが、特に牢記し實行して頂きたいことは左の京大總長山田三良博士の吐露された一言である。

博士は

神保新管長の奉告文宣辭には同感である、國家非常の時、異體同心法國の冥合に努力すべきことを望む從つて自分はこれ迄宗門の行政には超越して居たけれ共、今後は新管長の誓言を信じ、若しそれが實現されずして從來の有樣を續ける場合には、到底傍觀し得られないが故に其の時は遠慮なくこれに容喙し、而かも容れられねば大に輿論を喚起して祖風の恢弘、法國の爲めに斷起するであらう。

と至誠を披瀝された。三百餘の滿堂の大拍手は吾等今後活目し期待を强くするものである。

教報

本部團報

法華經講座　精神文化の基礎　個人　社會　國家すべてを救濟する大精神の源泉たる法華經が、毎週木曜日晩、文學士小林講師に依つて私共の日常生活に即して親切なる講話を續けられて居る。歲末の極めて忙しい時にも拘らず數十の、求道熱誠の識者男女の敬度な

容委は、本朝六百年前を回顧せしむるに充分である。かゝる法悦境をば未知の方々にも何とかしてお勧め致したい、そこは最早理窟でなく莊重森嚴たる活訓事實である。

日曜日集會 例に依つて午後二時より左記の如く勤行と法話が營まれた。

十一月二十六日 第四日曜日

信仰への徑路　中村　清一氏
立正安國の意義　山口　智光師

十二月三日 第一日曜日

佛教の骨髓　田中　道爾氏
所感　本郷常次郎氏
門下奮起の時　和賀　義見師

講話後　約一時間ばかり座談會を催し隔意なき信仰談が交へられ自他の法益甚大であつた

同　十日 第二日曜日

臘月八日　明星輝ける大陸の沒める曉天菩提樹下に端坐ましませる菩薩は、其八相示現業魔を降して成道妙覺の境に達せられた最も人類祝福の日である。『天に太陽が出るよりも地上に一人の釋尊の現はれこそ遙かに有難い』と古聖は述べられた、佛徒としてのみならず一切衆生は悉く皆この　佛陀の成道を祝福せずばなるまい。

本圓は十日午後二時　莊嚴された御寶前に大衆一結、山口、梶木等の諸師と俱に法味を排げ、三時より礒部理事司會者となりて先づ成道音樂並に小林一郎先生の菩提樹下を聞き　それより河合講師の釋尊の成道に就て約一時間の法話あり、終つて礒部美月女並に本多都喜子女史の彈琴に一同無我の神境に遊ぶの想で、漸く點燈の頃お互綿々として感謝しつゝ散會した。

同　十七日 第三日曜日

日蓮主義の信仰　中村　清一氏
唱題成佛の意義(完結)梶木　顯正師

地方布教 十一月二十五日　福島支部の秋季大講演會に本部より上田理事長、和賀義見師並に礒部理事は出講し大に法陣を展開した。詳細は別項福島教信の通り。

横濱教誌

十一月四日 夜　神奈川篠原町佐藤氏宅にて集り。「法行と信行」礒部先生

同七日 夜　中區辨天町伊藤氏方にて集り小西日喜師も東京より見えられた。

同八日 夜　磯子高橋氏方にて悲母の二七日忌追善供養「佛教の要道」礒部先生

同十四日 夜　中區長谷川氏方にて集り。「法華の開會」礒部先生

同十五日 夜　神奈川榮町石毛氏方にて集り。小西師御來濱「人格の光」礒部先生

同十八日 午後三時生麦貝塚氏方にて集り小西師の御法話。

同二十四日 夜　磯子大内氏方にて集り。「門下の覺醒を促す」礒部先生

同二十七日 夜　三ツ澤齊藤氏方にて集り小西師御來講。

福島教信

十一月二十五日 此日は福島では珍しい絶好の快晴であつた。釋尊の廣大無邊なる慈悲は吾々の微力にまでもかく及ぶのかと思ふと感無きを得ない。午後二時福島高商日蓮聖人遺徳會々員一同は、自動車にてビラを撒き「今晩公會堂に日蓮主義講演會があります」と呼びながら市内を一巡して、當夜の國難打開日蓮主義講演會の第一聲を放つた。講演は午後六時より次の順序で行はれた。

一開會の辭　者井　昇氏
一祖國を救ふの人　礒部　滿事氏
一東洋文化發興の期　上田　辰卯氏
一日蓮聖人御出現の大因緣和賀　義見氏
一閉會の辭　岩井　霖氏

會場にぎつしり詰つた數百の聽衆は、諸先生の言々句々心血より迸る妙辯を固唾を呑んで傾聽し、滿場座なく唯時々嵐の如き拍手の音が響くのみであつた。會は十時に閉ぢられたが聽衆は如何なる思を懷いて歸られたであらうか、特に高商、師範、商業等專門學校の學生が夥しく來聽されて居た事は甚だ吾人の心を強くするものであつた。

同二十六日 午前十時より支部中村氏宅に於て、礒部先生を中心に座談會が催された。或は質疑應答が交され或は所懷を述べて、各々時の經つのを忘れ、先生が御歸京の途につくまで語り合ひ、最後に一同勤行を修して惜しい別れをした。

× × ×

講演會後數日を出でずして支部へ數名の入會者を見た、之は皆て例を見ざる所であり、唯此一事だけでも當日の講演が如何に感銘深いものであつたかを窺ふことが出來るであらう。又此講演會を機緣として福島市外渡利村佛眼寺内にある信仰會々員約四十名の青年諸氏の座談會に岩井、中村、金澤の三氏が出席され、今後志を同じうする者として進むことが出來るやうになつたのは誠に喜ばしい次第である。而して中村、金澤兩氏は更に二本松町や栗野村にも法輪を轉ぜらるゝことは實に愉快な大善事と思ふ。

二本松教信

十一月十一日 午後一時五十七分當縣通過にて遺骨三基山形聯隊に歸る因つて見送讀經す。

同十五日 午前六時五十九分當縣通過にて山形部隊原隊に歸る因つて歡送す。

同十五日 貧困救濟事業二本松佛教不染會托鉢修行。

同二十日 午前四時四十二分當縣通過にて八師團滿洲派遣部隊行く因つて歡送す。

同二十九日 於本久寺御會式　笹本　景義師
日蓮聖人の教へ　中島　元道師
大乘の心

同三十日 於蓮華寺御會式　菅野　顯孝師
金剛心　笹本　景義師
一念隨喜の心　中島　元道師
菩薩行

謹賀新年

顯本法華宗管長　東京市品川區南品川　笹川日堂
同　品川區南品川　今成日誓
本光寺　豊島區雜司ヶ谷　鈴木日雄
圓常寺　牛込區早稲田　木村日保
正法寺

賀　正　報恩閣　東京市淺草區新福井町
賀　正　大日本立正會館　同江戸川區小松川逆井
賀　正　本佛教會　同　瀧野川區瀧野川
賀　正　大日本立正會館　千葉縣市川町

新加盟者

東京市本郷區本郷五ノ二十　松岡ふゆ子殿
大阪市東成區林寺町二七八　東峰太郎殿
（磯部氏御紹介）
川口市榮町三ノ六六〇　伊坂さと子殿
（松岡冬子氏御紹介）
甲府市三日町五九　坂本由金殿
同　紅梅町十二　中澤欣吾殿
同　富士川十五　高橋捷造殿
同　横近習町十四　菊島保殿
（高野孫左衛門氏御紹介）

寄附維持金圓賛誌料領收

（自十一月二十一日至十二月二十日）

一金五拾錢也　東京　松岡ふゆ子殿
一金貳圓貳拾錢也　川口　伊坂さと子殿
一金拾圓也　東京　遠澤二郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　山路益三殿
一金壹圓貳拾錢也　神戸　廷廣純靜殿
一金五圓也　千葉縣　片岡盛助殿
一金六圓六拾錢也　東京　今成日雪殿
一金貳圓貳拾錢也　名古屋　石上愛子殿
一金壹圓貳拾錢也　萩　梅屋勇助殿
一金壹圓也　東京　加藤高太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　安井源吉殿
一金四圓也　千葉縣　立正會殿
一金四圓八拾錢也　東京　和賀義見殿
一金六圓也　同　總引弘殿
一金貳圓貳拾錢也　茨城縣　總引丑之介殿
一金貳圓也　東京　宇野博順殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　岩崎清八殿
一金貳圓四拾錢也　川崎　山田三五郎殿
一金貳圓貳拾錢也　彦根　林田義夫殿
一金拾圓也　東京　柴田武治殿
一金壹圓也　同　小峰登子殿
一金貳拾五圓也　同　横山正三殿
一金壹圓五拾錢也　同　濱中治三郎殿
一金貳圓也　東京　佐野中志殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　芝崎嘉一郎殿
一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　武藤鮮喜殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡縣　石井日省殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　吉田かつゑ殿
一金五圓也　同　山田英二殿
一金拾貳圓也　千葉縣　富田こと殿
一金貳圓貳拾錢也　甲府　坂本由金殿
一金貳圓貳拾錢也　同　中澤欣吾殿
一金貳圓貳拾錢也　同　高橋捷造殿
一金貳圓貳拾錢也　同　菊島保殿
一金貳圓貳拾錢也　萩　梅屋勇助殿
一金貳圓貳拾錢也　東京櫻井忠右衛門殿
一金拾圓也　同　井上道太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　水戸　前刀寶剛殿
一金參拾圓也　甲府　高野殺殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　土屋喜久殿
一金五拾圓也　横濱　中村清一殿
一金貳圓五拾錢也　大阪　東峰太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　福井治三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　津山　渡邊孝殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　大塚誠殿
一金貳圓貳拾錢也　中津　有田日達殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　西村正殿
一金壹百圓也　東京　伊東竹三郎殿
一金貳圓也　同　沼部彌太郎殿
一金參圓也　同　多田房太郎殿
一金參圓也　大谷種次郎殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

恭賀新年

財團法人統一團本部

理事長　上田辰卯
理事　井上道太郎
同　伊東竹三郎
同　磯部滿事
同　中村清兵衛
同　山田英二
同　柴田武治
監事　小澤元重
同　横山正三

正賀

同師會

伊東竹三郎
磯部滿事
和賀義見
梶木顯正
河合陟明
田中道爾
中村清一
山口智光
小西日喜

謹賀新年

財團法人統一團横濱支部

岩上浦三郎
石毛はる
西村喜勢
大内正工
和田皆吉
金子光和
貝塚敏二郎
高田傳六
齋藤勇吉

謹賀新年

財團法人統一團福島支部

岩井鶴
岩淵經夫
金澤利江
中村美津
福島高商日蓮聖人
鐵仰會一同

正賀

東京市澁谷區笹塚町 小林一郎
同 男爵 品川區大井町 井上清純
川崎市池上新田 池上幸健
東京市四谷區三光町 陸軍中將 井上一次
同 海軍少將 中野區打越 岩野直英
同 小石川區音羽町 鳩山一郎
同 品川區南品川 本多禮三
同 世田谷區代田吹上 子爵 小笠原長生
府下千歳村烏山 陸軍大將 大迫尚道

東京市品川區西大崎 文學博士 川合貞一
同 本郷區西片町 高島平三郎
甲府市柳町 高野毅
東京市豊島區雜司谷 矢野茂
同 品川區大井町 法學博士 松井茂
同 小石川區白山御殿町 文學博士 姉崎正治
同 芝區白金今里町 岡崎久次郎
府下吉祥寺本田北 海軍中將 佐藤鐵太郎
東京市中野區中野 海軍中將 佐藤皐藏

同 牛込區市ヶ谷仲町 佐藤梅太郎
同 大森區南千束町 清明文庫 宮原六郎
同 豊島區池袋 宗務局長 下村壽一
同 品川區西大崎 知法意岡會理事長 柴田一能
同 牛込區西五軒町 眞清淨寺 釋眞誓
同 小石川區大塚仲町 關原忠三
盛岡市北山 法華寺 田口公信
同 加賀野 市長 中村謙藏
同 仁王刀圭町 醫學博士 小林茂雄

新年の御慶芽出度申納候

東京市品川區大井町 沼部彌太郎
同 大森區山谷 立正教舍
同 大森區山谷 西山喜太郎
川崎市榎町 大日本妙道會 毛見熊太郎
東京市中野區江古田 石川隆一
同 四谷區須賀町 本郷常次郎
同 麹町區丸ノ内 大川合名會社 池田新一
同 荏原區小山町 菊地雄三
同 淺草區藏前片町 セルロイド玩具問屋 笠間信語

同 日本橋區馬喰町 人形問屋 平井三造
同 上野廣小路 きく屋 難波芳松
同 京橋區月島 巴組鐵工所 野澤一郎
同 目黒區洗足 大谷權次郎
同 牛込區原町 内海穎二
同 本郷區元町 綿引弘
同 豊島區駒込 室内装飾 和賀謙介
同 荒川區尾久町 純古挿花一乘流家元 増田一德
同 日本橋區小傳馬町 クリーニング洗染所 小峰豊

同 大森區入新井 市川箔十郎
同 本郷區駒込富士前町 高田直三郎
同 品川區北品川 秋澤吉藏
同 澁谷區澁谷宇田川 石原重太郎
同 本所區緣町 田中峰太郎
同 荒川區日暮里旭町 四恩電器製造所 島谷正三郎
同 荏原區戸越 榊原覺次郎
同 神田區小川町 本田屋洋服店 尾崎熊吉
同 本所區吾妻橋 加藤重太郎
同 日本橋區馬喰町 後藤源次郎
同 小石川區小日向水道町 東弘堂 濱中治三郎

念告

從來本部に於て正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清援相仰ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本團は一大飛躍を計畫仕り多大なる犧牲の下に先づ本誌の增大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌卷頭略則御諒承の上何卒爲法國爲一切衆生團員として最善の御賛助あらんことを偏に奉懇禱候

猶現在團費誌料前金御拂込の方は其儘團員たるべき特權有之候へ共前金切の方は規定通りに取扱可申此段爲念申添候也

財團法人 統一團

御願

今回本誌の紙數を每號一躍十六頁以上增加仕り一大明教法華經の講話を連載可致候然るに昨今紙價は益々高騰せる爲めかゝる增大は最も本會計の苦痛とする處に御座候へ共今や非常時生活難の聲喧騒たる折柄各篤志諸氏の御清援を仰ぎ一般には定價を其儘据置く事と致し申候に付諸事御賢察の上團費並に誌料は何卒前金御拂込の程幾重にも御願申上度候

恐々

財團法人統一團
會計

日時 正月七日（日）午後四時
會場 小石川區音羽 統一會館

皇太子御誕生奉祝
新年會

法要、來賓感話、開糧、團員懇談等

◆會費 金壹圓也
◆詳細は御通信

新案第176867
特許第179231

クオン、カラー

詰襟用カラー（セルロイド芯入）

特長（衛生 經濟 便利）

三拍子揃ひ 特價拾錢 送料貳錢

衛生 夏は汗を吸取り冬は肌ざはり爽やかにして皮膚をいためず常に襟元の美が保たれます。

經濟 本品は低廉にして永久型の崩れぬ製法にて從來のカラーと異なり洗濯屋へ出す費用と手數を省き御家庭で簡單に洗濯が出來ます。

便利 時代の要求により生れたクオンカラーは洗濯簡易ですから二三本あれば一年中間に合ひます。

クオン、カラー製造發賣元
東京市四谷區内藤町一番地
山田商會
電話四谷五〇一五番
振替東京六貳貳番

◎洗濯の仕方、一時間位水又はぬるま湯に入れたカラーを板の上に置き、石鹸を付け、ブラシにてこすりシボラズ水ゆすぎして其まゝ乾して下さい 乾き次第直に御使用が出來ます。

警視廳各學校御用、三越、三省堂
一流洋品店にて發賣

清水龍山　守屋貫敎　中谷良英
鈴木一成　榊原久遠　共編

新修 略註 日蓮聖人遺文集

内容見本呈上

再版 改訂

科段別註 御遺文百廿余編（脚註入）

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

體裁　裝幀
卷頭挿入クリームアート寫眞版七葉
四六版　縦六寸二分　横三寸五分
紙數　千百十四頁
特製　總皮　三方金
並製　總クロース　天金
函入最上美本

定價　特製　三圓八十錢
並製　二圓八十錢
送料　廿一錢

發行所
東京市日本橋區江戸橋二ノ六（明正ビル）
久遠閣
電話日本橋㊥三一七番
振替口座東京七二八〇六番

本多日生上人名著在庫品特價提供

		特價	送料共
一聖語錄	改版	金壹圓八拾錢	金貳圓拾錢
一日蓮主義本領		金貳圓五拾錢	金壹圓五拾錢
一法華經要義	賜天覽	金壹圓五拾錢	金貳圓九拾錢
一日蓮主義心髓		金貳圓九拾錢	金貳拾五錢
一日蓮主義精要		金貳拾五錢	金五拾錢
一佛教の本質と其價値		金五拾錢	
一法華經要品			

礒部滿事謹輯

		特價	送料共
一本多日生上人		金壹圓七拾錢	金拾錢
一勤行作法		金拾錢	金五厘

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人 統一團出版部
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌

定價　一冊　金拾錢
送料　金五厘
一ヶ年前金　送料共　金壹圓貳拾錢

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

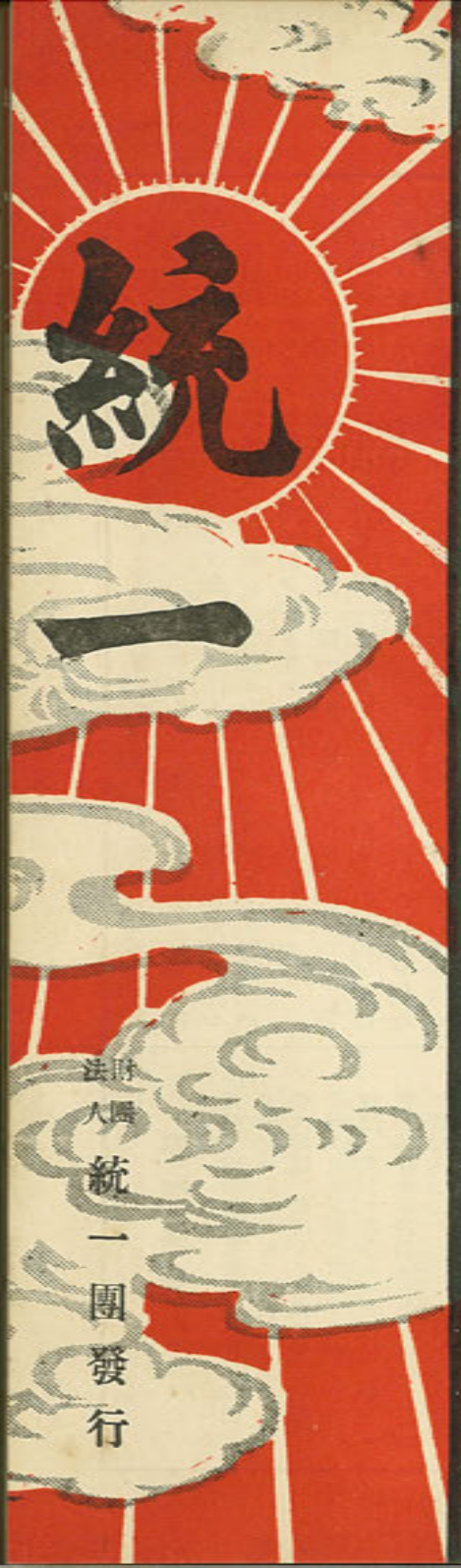
注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和八年十二月廿四日印刷納本
昭和九年一月一日發行
（第四百六十六號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　礒部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目次

聖訓摘要……日生上人
日蓮教學講座（第五回）……河合陟明
新年の挨拶……上田辰卯
所感……佐藤鉄太郎
法華經講話（第二講）……小林一郎
記事
○各地教信　○寄附團費誌料領收
和歌二題……彌重まさ子

第三十九年二月號